埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第36集

肥塚古墳群Ⅱ・肥塚館跡

2020

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第36集

肥塚古墳群Ⅱ・肥塚館跡

こいづかこふんぐんに　こいづかやかたあと

2020

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、関東を代表する２大河川である、利根川・荒川が最も接近する流域に位置し、丘陵・台地・沖積低地と地形が変化に富んでいます。

こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡でもあります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

本書は熊谷市教育委員会において、平成30年に発掘調査を実施した、肥塚古墳群・肥塚館跡について報告するものであります。本遺跡からは、市内でも調査例の少ない古墳時代中期の集落跡が確認され、その中でも、祭祀が執り行われていたと推定される竪穴建物跡の発見は、古墳時代の人々の生活を知る上で、貴重な成果といえます。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。元号は平成から令和へとかわりましたが、私たちは今後もかわらず文化財の重要性を、後世へと引き継いでまいりたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行にあたりまして、文化財保護にご理解・ご協力を賜りました、関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野原　晃

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市肥塚一丁目 380 番地１ほかに所在する、肥塚古墳群（埼玉県遺跡番号 59 － 012）及び肥塚館跡（埼玉県遺跡番号 59 － 069）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、住宅建設とその取付け道路建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、発掘作業と整理・報告書作成作業を熊谷市教育委員会が実施したものである。また、費用については、委託者である江森和夫氏が負担した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は平成 30 年 10 月 15 日から平成 30 年 12 月 20 日までである。
整理・報告書作成期間は平成 31 年４月１日から令和２年３月 27 日までである。

5　発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会島村範久が行い、腰塚博隆が補佐した。
本書の執筆・編集は、熊谷市立江南文化財センター内作業員の協力のもとに島村が行い、腰塚が補佐をした。

6　写真撮影は、発掘調査を島村及び腰塚が、出土遺物は島村が行った。

7　出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

8　本書の作成にあたり多くの方々から御教示、御協力を賜った。（敬称略）
江森和夫　金子正之　埼玉県教育局文化資源課　株式会社ファイブイズホーム

凡　　例

1　本文中、遺構の表記記号は次のとおりである。

　ＳＤ…溝跡、ＳＫ…土坑、ＳＩ…竪穴建物跡、Ｐ…ピット

2　遺構中の表記記号は、次のとおりである。また、Ｓ…石、土層表記中、表記のないものは遺物を表す。

3　遺構挿図の縮尺は次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

　遺構全体図…１/200、竪穴建物跡・溝跡・土坑・ピット…１/60

4　遺構土層断面図及びエレベーション図のポイント標高は、原則として同一図版、同一の遺構の標高は統一した。例外的に標高差が大きい場合は統一せず、その都度表記した。

5　遺物挿図の縮尺は、下記のとおりである。

　土器・陶磁器…１/４　石製品・鉄製品…１/３

6　遺物挿図中、赤彩があるものは　　で示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

　法量の単位は㎝・ｇである。（　）を付したものは推定値を示す。胎土は土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

Ａ…白色粒子　Ｂ…黒色粒子　Ｃ…赤色粒子　Ｄ…褐色粒子　Ｅ…赤褐色粒子　Ｆ…白色針状物質

Ｇ…長石　Ｈ…石英　Ｉ…白雲母　Ｊ…黒雲母　Ｋ…角閃石　Ｌ…片岩　Ｍ…砂粒　Ｎ…礫

8　土層及び土器等の色調は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2010 年版）に照らし、最も近似した色相を示した。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織…2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……8
　1　調査の方法……8
　2　検出された遺構と遺物……8
Ⅳ　遺構と遺物……11
　1　竪穴建物跡……11
　2　溝跡……25
　3　土坑……27
　4　ピット……31
　5　遺構外出土遺物……32
Ⅴ　調査のまとめ……33

挿図目次

第 1 図　埼玉県の地形図……3
第 2 図　周辺遺跡分布図……4
第 3 図　調査地点位置図……9
第 4 図　調査区全測図……10
第 5 図　第1号竪穴建物跡……11
第 6 図　第1号竪穴建物跡出土遺物……11
第 7 図　第2号竪穴建物跡……12
第 8 図　第2号竪穴建物跡出土遺物……13
第 9 図　第3号竪穴建物跡（1）……15
第 10 図　第3号竪穴建物跡（2）……16
第 11 図　第3号竪穴建物跡出土遺物（1）…17
第 12 図　第3号竪穴建物跡出土遺物（2）…18
第 13 図　第4号竪穴建物跡（1）……20
第 14 図　第4号竪穴建物跡（2）……21
第 15 図　第4号竪穴建物跡出土遺物（1）…23
第 16 図　第4号竪穴建物跡出土遺物（2）…24
第 17 図　第1号溝跡……26
第 18 図　第2号溝跡……27
第 19 図　土坑……29
第 20 図　溝跡・土坑出土遺物……30
第 21 図　ピット……31
第 22 図　遺構外出土遺物……32
第 23 図　肥塚氏系図……34
第 24 図　肥塚村字本村地内の地名
　　（『肥塚の今昔』より作成）……34
第 25 図　明治期迅速図の肥塚村字本村周辺…35
第 26 図　迅速図の道の復元……35

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……5
第２表　第１号竪穴建物跡出土遺物観察表……11
第３表　第２号竪穴建物跡出土遺物観察表……13
第４表　第３号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）…18
第５表　第３号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）…19
第６表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表…24
第７表　溝跡・土坑出土遺物観察表……30
第８表　ピット計測表……32
第９表　遺構外出土遺物観察表……32

写真図版目次

図版１　Ａ区全景（東から）
Ａ区全景（西から）
Ｂ区全景（北から）
Ｂ区全景（南から）

遺　構

第１号竪穴建物跡（南西から）
第１号竪穴建物跡遺物出土状況
第２号竪穴建物跡（北東から）
第２号竪穴建物跡遺物出土状況（１）
図版２　第２号竪穴建物跡遺物出土状況（２・３）
第３号竪穴建物跡（北東から）
第３号竪穴建物跡遺物出土状況（北東から）
第３号竪穴建物跡遺物出土状況（１～４）
図版３　第３号竪穴建物跡カマド（北東から）
第３号竪穴建物跡カマド遺物出土状況
第３号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況(東から)
第４号竪穴建物跡（北東から）
第４号竪穴建物跡敷石検出状況（上が南）
図版４　第４号竪穴建物跡遺物出土状況（１～７）
第４号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況(南から)
図版５　第４号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況
第１号溝跡（Ｂ区 西から）
第２号溝跡（北東から）
第１号土坑（西から）
第２号土坑（北から）
第３・４号土坑（北から）
第５・６号土坑（西から）
第７号土坑（西から）

遺　物

図版６　第１号竪穴建物跡　第６図１
第２号竪穴建物跡　第８図１～８
図版７　第３号竪穴建物跡　第 11 図１～ 16
図版８　第３号竪穴建物跡　第 11 図 17 ～ 21・24・25、第 12 図 29 ～ 31
図版９　第４号竪穴建物跡　第 15 図１～ 18
図版 10　第４号竪穴建物跡　第 15 図 19 ～ 22
第 16 図 24・25
第１号溝跡　第 20 図２
第２・６号土坑　第 20 図４～ 11
遺構外出土遺物　第 22 図１・３～８

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

平成29年12月2日付けで、事業者（株式会社ファイブイズホーム 代表取締役 細井保雄）から文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出の提出があった。

これを受けて熊谷市教育委員会は、同年11月24日に9箇所のトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、現地表面下60～80㎝の深度から古墳時代の遺構、及び同時代の土器などの埋蔵文化財の所在が確認された。

その後、埋蔵文化財の所在が確認された旨を事業者あてに回答するとともに、その保存に関する協議を重ねたが、工事は保護層が設けられない工法であり、計画の変更はしない方針となったため、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は、平成30年10月1日付け熊教社埋発第297号で、文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、平成30年10月15日から開始した。

なお、埼玉県教育委員会から熊谷市教育委員会あてに、平成30年7月25日付け教文資第4-582号で発掘調査実施の指示通知があった。

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

発掘調査は、平成30年10月15日から同年12月20日にかけて実施した。調査面積は370㎡である。

調査は重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行い、その後、人力による遺構確認作業を行った。その結果、竪穴建物跡・溝跡・土坑などを確認した。次いで、これら各遺構を順次精査し、遺構平面図・断面図等を作成し、また、個別に遺構や遺物出土状況等の写真撮影を行った。そして、平成30年12月20日に器材等を撤収して作業を終了した。

（2）整理・報告書作成作業

整理作業は、平成31年4月1日から令和2年3月27日まで実施した。

4月から遺物の洗浄・注記・復元を行い、その後、10月まで順次、遺物の実測・拓本採取を行った。11月からは遺構の図面整理作業を行い、遺構・遺物図面のトレース、遺構・遺物の図版組を実施した。12月からは遺物の写真撮影、原稿執筆・割付等の作業を行い、翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を経て3月27日に本報告書を刊行した。

3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

平成 30 年度　発掘調査

教育長	野原　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　健
社会教育課文化財保護係業務主幹	宮前　彰生
係長	松田　哲
主査	小島　洋一
主査	星　祥子
主任	藏持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　端
主事（任期付任用職員）	武部　喜充
主事（任期付任用職員）	島村　範久
主事（任期付任用職員）	大野　美知子

平成 31 年度（令和元年度）整理・報告書作成

教育長	野原　晃
教育次長	小林　教子
社会教育課長	鶴田　敏男
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野　健
社会教育課文化財保護係業務主幹	宮前　彰生
係長	松田　哲
主査	小島　洋一
主査	星　祥子
主任	藏持　俊輔
主任	山下　祐樹
主任	腰塚　博隆
主任	新井　端
主事（任期付任用職員）	武部　喜充
主事（任期付任用職員）	島村　範久
主事（任期付任用職員）	大野　美知子

Ⅱ　遺跡の立地と環境

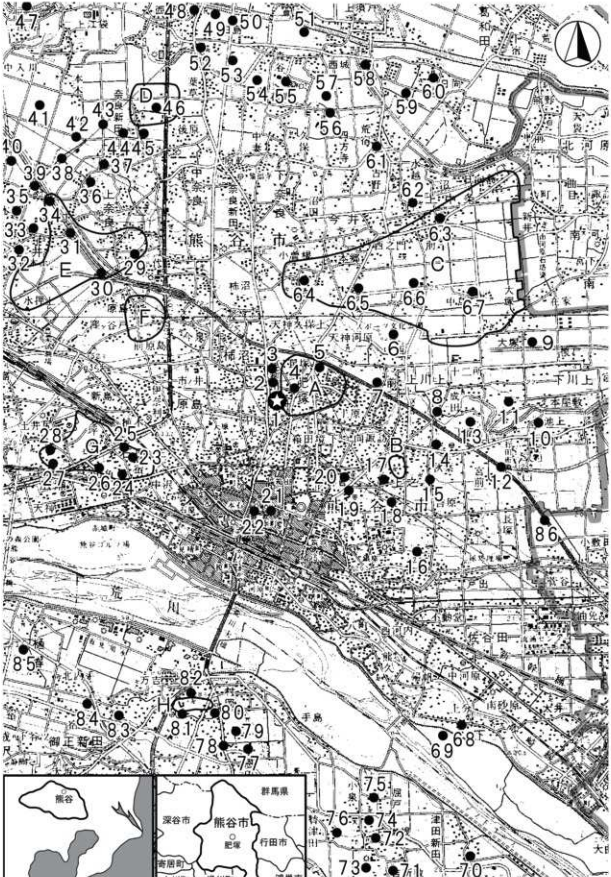
熊谷市は、埼玉県の北部に位置する中核都市である。市の北側には利根川が、南側には荒川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には西側に櫛挽台地、荒川を挟んで南側には江南台地、さらに南側には比企丘陵、北側・東側には妻沼低地が広がっており、市の大半は妻沼低地上に位置する。

櫛挽台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近まで延びている。標高は約36～54mで、妻沼低地に向かって緩やかに下がっている。

櫛挽台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新期荒川扇状地が広がっている。新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。この自然堤防や後背湿地上には多数の遺跡,及び古墳群が存在し、今回報告する肥塚古墳群・肥塚館跡もこうした地形上に立地している。肥塚古墳群・肥塚館跡は熊谷市肥塚に位置し、市のほぼ中央に所在する。標高は、約26.5mである。

本遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、本遺跡の南東約4kmに所在する諏訪木遺跡（15）では、縄文時代後期からの遺構・遺物が確認されている。ここでは、後期中葉の加曽利B式期から晩期中葉の安行3d式までの遺構・遺物が確認されており、特に、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の調査では遺構に伴って大型の遺物が出土し、集落の存在が明らかになっている。この段階の遺跡は市の北部、妻沼低地上の西城切通遺跡（51）、場違ヶ谷戸遺跡（52）などがある。後期中葉以降は遺跡が途絶えてしまうが、櫛挽台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）では晩期最終末の浮線文土器が多数確認されている。

第１図　埼玉県の地形図



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	No.	遺　跡　名	時　　代
	熊　谷　市		49	宮前遺跡	奈良・平安
1	肥塚館跡	中世	50	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
2	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	51	西城切通遺跡	縄文後・晩
3	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	52	場逢ヶ谷戸遺跡	縄文後
4	出口下遺跡	古墳後	53	鷲ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安
5	八幡山遺跡	古墳	54	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安
6	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	55	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安
7	河上氏館跡	中世	56	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安
8	成田遺跡	古墳後	57	西城館跡	平安
9	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	58	東城館跡	平安
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	59	先載場遺跡	古墳後、奈良
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	60	八幡間遺跡	古墳後、奈良
12	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	61	光屋敷遺跡	古墳後、奈良・平安、近世
13	宮の裏遺跡	古墳後	62	中条氏館跡	中世
14	成田氏館跡	中世	63	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世
15	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	64	東浦遺跡	古墳前、平安
16	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中・近世	65	赤城遺跡	古墳、奈良・平安
17	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、近世	66	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世
18	前中西遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	67	上中条中島遺跡	古墳後、奈良・平安
19	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	68	市田氏館跡	中世
20	箭田氏館	平安末～中世	69	久下氏館跡	中世
21	宮町遺跡	奈良・平安、中世	70	旭町遺跡	奈良・平安
22	熊谷氏館跡	中世	71	仲町遺跡	奈良・平安
23	兵部裏屋敷跡	中世	72	宮前町遺跡	奈良・平安
24	御蔵場跡	近世	73	宮町遺跡	奈良・平安
25	天神前遺跡	古墳中・後、中世	74	宮前遺跡	奈良・平安
26	田角遺跡	平安	75	北方遺跡	奈良・平安
27	不二ノ腰遺跡	奈良・平安	76	西浦町遺跡	奈良・平安
28	高柑遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世	77	腰巻遺跡	奈良・平安
29	本代遺跡	古墳後、近世	78	西浦遺跡	奈良・平安
30	下河原上遺跡	近世	79	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
31	下河原中遺跡	奈良・平安	80	北西原遺跡	奈良・平安
32	稲荷木上遺跡	古墳後	81	村岡北西原遺跡	平安
33	水押下遺跡	古墳後	82	村岡館跡	平安末
34	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	83	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
35	玉井陣屋跡	平安末～中世	84	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
36	奈良氏館跡	平安末～中世	85	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
37	士用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安		行　田　市	
38	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	86	小敷田遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安
39	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安		古　墳　群	
40	寺東遺跡	縄文前～後		熊　谷　市	
41	別府条里遺跡	奈良・平安	A	肥塚古墳群	古墳後～末
42	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安	B	上之古墳群	古墳後～末
43	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
44	西浦遺跡	古墳後	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
45	東通遺跡	古墳後	E	玉井古墳群	古墳後
46	横塚遺跡	古墳前、平安	F	原島古墳群	古墳後
47	道ヶ谷戸遺跡	縄文後、奈良	G	石原古墳群	古墳後
48	実盛館	平安	H	村岡古墳群	古墳後

弥生時代は、初期段階の前期末から中期前半までの土器片が、藤之宮遺跡（17）から出土しているが遺構は確認されていない。遺構として確認された遺跡は、櫛挽台地直下や妻沼低地北部の低地に集中し、横間栗遺跡、飯塚遺跡、飯塚南遺跡、深谷市上敷免遺跡（いずれも地図未掲載）などで、いずれも集落ではなく再葬墓である。しかし、中期中葉になると一転して市の東部に集落が集中して展開される。東日本でも最古段階の環濠集落とされる池上遺跡（12）や、その墓域とされる最古段階の方形周溝墓が確認された行田市小敷田遺跡（86）、後期前半まで続く前中西遺跡（18）などが出現し、集落としての展開が本格的に始まる。中期後半になると前中西遺跡・諏訪木遺跡・北島遺跡（６）で集落が営まれるが、

特に前中西遺跡はこれまでの調査結果から、当地域の拠点集落であることが判明している。なかでも、大阪湾型銅戈を忠実に模倣した、全国初出土の石戈は注目に値する。また、北島遺跡では大規模な集落や墓域のほか、水田に水を引き込む水路や堰が確認されており、水田経営が本格化したことを物語っている。なお、北島遺跡は前中西遺跡とともに、東日本屈指の遺跡として注目されている。後期になると遺跡数が激減し、前中西遺跡以外確認されず集落は台地上や丘陵に移っていく傾向にある。

古墳時代になると、集落は台地上や自然堤防上に形成されるようになる。前期の遺跡は近年確認例が増加しており、前中西遺跡もその一つであるが、ここからは前方後方形の方形周溝墓が確認されている。この周溝墓ではその主体部と考えられる土坑が確認され、また、周溝からは土師器のほかに、祭祀に使用されたとされる一木造の二股鋤が出土している。周辺では前代に続き、諏訪木遺跡や北島遺跡で集落跡が確認され、また、方形周溝墓による墓域も確認されている。中期になると確認例が少なくなり、本遺跡や前中西遺跡・古宮遺跡（10）・中条遺跡（63）内の権現山遺跡などで遺構・遺物が確認されている。また、5世紀末頃の鎧塚古墳や女塚1号墳（共にC：中条古墳群）、市指定史跡の横塚山古墳（D：奈良古墳群）などの古墳が築造されている。鎧塚古墳は全長43.8 mで2箇所の墓前祭祀跡から須恵器高坏型器台が出土している。また、女塚1号墳は全長46 mで周堀が二重に巡り、盾持武人埴輪や楽人埴輪などが出土している。横塚山古墳は全長40 mと推定され、一部にB種横ハケ調整が見られる朝顔形埴輪が出土している。後期になると遺跡数は爆発的に増加し、奈良・平安時代まで継続するものが多く、本遺跡の北東に隣接する出口下遺跡（4）、一本木前遺跡（42）、下田町遺跡（未掲載）などが挙げられる。後期から平安時代にわたる遺構・遺物が確認された出口下遺跡では、竪穴建物跡が14棟、古墳3基が確認されている。一本木前遺跡では前期から後期にわたる竪穴建物跡が約350棟確認され、そのうち、中期末から後期のものがおおよそ250棟確認されている。また、4箇所の土器祭祀跡が確認され大量の土器が出土している。弥生時代中期後半から中世にかけての遺構・遺物が確認された下田町遺跡では、後期の竪穴建物跡が302棟確認されており、また、集落の北端で大規模な溝跡が確認されている。この溝跡からは須恵器甕や土師器坏・甕などが多量に出土しているが、土師器坏が100点以上まとまって出土しており、これらの土器と共に農具などの木製品や獣骨・魚骨・貝殻なども出土している。調査の結果、この遺跡は、旧入間川に注ぎ込む和田吉野川河畔に設けられた「川津」として機能していたと考えられている。一方、古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地上や微高地である自然堤防上に築造される。低地上では肥塚古墳群（A）、上之古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらの古墳群はおおむね6世紀から8世紀初頭にかけて築造されたものである。市内の古墳群で特筆されるものとして、石室に用いられている石材がある。利根川に近い中条古墳群などでは、大塚古墳を除き石室に利根川水系の榛名二ツ岳の噴出物である角閃石安山岩を用いており、荒川に近い古墳群では川原石を用いている。しかし、肥塚古墳群では小規模な円墳が16基ほど確認されているが、この古墳群の石室は角閃石安山岩を用いたものと、川原石を用いたものの両者が混在する状況にある。

古墳時代後半の多くの集落は、増減はするものの奈良・平安時代へと継承され、律令体制下に組み込まれていく。低地一帯では中条条里遺跡（9）、別府条里遺跡（未掲載）などが条里制に関わる遺構の痕跡をとどめている。集落は規模の大きなものが多く、特に北島遺跡は本遺跡周辺での中心的な存在と

され、数百棟にも及ぶ竪穴建物跡、四面庇が付いた大型の掘立柱建物跡、幅6ｍの側溝をもつ道路状の遺構、水田跡などが確認されている。遺物は施釉陶器を含む大量の土器類のほか「筮」と刻書された施釉陶器をはじめ、大量の墨書土器が出土し、また、円面硯や樹脂が固まった状態の笠などが出土している。遺構や出土遺物から、この遺跡は地域の有力者の拠点と捉えられるが、円面硯や墨書土器・施釉陶器などから、公的な性格も持つ郡司層などが関わる官衙的な施設とも考えられている。また、諏訪木遺跡でも区画溝内に四面庇が付いた大型の掘立柱建物跡や、軸が合う掘立柱建物跡が多数確認されている。ここの旧河川跡からは、三彩陶器の小壺や人形・斎串などの木製品が出土し、これらを使った水辺の祭祀が行われていたことが確認されている。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党や在地の武士団が台頭しはじめる時期であり、市内でも館跡が多数みられる。肥塚館跡である本遺跡や河上氏館跡（7）、成田氏館跡（14）、熊谷氏館跡（22）、玉井陣屋跡（35）、奈良氏館跡（36）、中条氏館跡（62）、市田氏館跡（68）、久下氏館跡（69）などがある。中世段階ではこれまでに、中条氏館跡や三ヶ尻地区に所在する黒沢館跡（未掲載）などの調査が実施されている。黒沢館跡は、渡辺崋山が著わした「訪瓰録」に記載されている「黒沢屋敷」と調査結果が合致した貴重な例である。また、近年、成田氏に関する資料が増加しており、成田陣の一端が明らかになりつつある。本遺跡の東約2.4㎞に所在する成田氏館跡は、平安時代末に成田助高が館を築いたとされている。時代は下って、文明11年（1479）、成田下総守（実名不明）が忍城（行田市）を本拠とし、古河公方足利成氏方となっていることから、成田氏の忍城入城は文明11年以前と考えられる。下総守を継いだのが正等である。近年の研究で、正等は岩付城（さいたま市）を築城した人物であることがわかってきた。しかし、正等は山内上杉氏の家宰、総社長尾景忠の三男顕泰を養子として迎えており、実名に山内上杉房顕（または、顕定）から顕の一字を与えられていることから、山内上杉氏・長尾氏と密接な関係にあったと考えられる。顕泰のあとを継いだのが親泰で、長泰一氏長へと受け継がれていく。一方、成田氏館については永享11年（1439）に勃発した結城合戦の翌年、結城方の一色伊予守が成田館に立て籠もり、室町幕府軍と合戦に及んでいる。これが史料上の初見である。また、15世紀中頃から古河公方足利成氏と、山内・扇谷両上杉氏は闘争を繰り返していたが、文明10年（1478）、成氏は成田陣に半年にわたって在陣している。成氏の軍勢は100騎や200騎ではなかったと思われることから、成田陣は相当な広さであったと考えられる。成田館跡の南には隣接して諏訪木遺跡があり、ここからは成田氏や古河公方に関連する遺構・遺物が多く確認されている。特に、平成20・25年度の調査では、古河公方系のかわらけが多く出土しており、それらは大型のもの、中型及び小型の3種類に分類されている。さらに、平成23年度の調査では、井戸跡から古河公方系の大型かわらけと、中型かわらけに伴って15世紀末から16世紀初頭とされる、山内上杉系のかわらけが出土している。古河公方足利氏と山内上杉氏は、闘争を繰り返す中で何度も和睦をしており、こうした両軍和睦の間に催された宴の残滓を、井戸に廃棄したものと考えられる。

このように、成田氏に関わる資料は増加しているものの、他の中世館跡に関しては実態が不明なものが多く、また、近世段階においても同様に情報が不足しているため、今後の調査成果に期待するところが大である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　調査の方法

今回報告するのは住宅建設及び道路箇所 370 ㎡についてである。発掘調査の方法は住宅建設部分をＡ区、道路部分をＢ区とした。

発掘調査は、重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行った後、木杭によるグリッド設定を行った。グリッドは一辺５ｍ×５ｍで設定し、調査区全体を網羅できるように南西隅から東へＡからＩラインとし、そして、北から南に向かって１から７ラインとした。その結果、Ａ区にはＤ～Ｆ―１～３グリッド、Ｂ区にはＡ・Ｂ―５・６、Ｃ―５～７、Ｄ・Ｅ―６・７、Ｆ―５～７、Ｇ―２～７、Ｈ―１～４、Ｉ―１・２の各グリッドが設定された。なお､座標は世界測地系による国家方眼座標に基づく基準点測量による。

表土剥ぎの最中、Ａ区では基盤の灰オリーブ土に褐色土の落ち込みや焼土が確認され、Ｂ区でも灰オリーブ土に溝状の灰色土の落ち込みや褐色土の落ち込みが確認された。表土剥ぎの後、面積が広いＢ区から人力により遺構確認のため、ジョレンによる精査を開始した。確認された遺構は各々移植ゴテなどを用いて手掘りで掘り下げを行い、出土した遺物は写真撮影後、出土状態の図面を作成し、また、確認された遺構は写真撮影後、遺構ごとに実測を行って図面を作成した。その後、遺構全体の写真撮影を実施し、調査区全体の全測図を作成した。

2　検出された遺構と遺物

本調査で検出された遺構は、竪穴建物跡４棟、溝跡２条、土坑７基、ピット８基であり、竪穴建物跡は全て古墳時代中期のものであった。そして、このうちの１棟からは約 3.2 ｍ× 1.2 ｍの範囲に敷石が検出されている。敷石は拳大から小指大の石で構成されており、円形と半月状に石が敷かれていない部分が確認された。竪穴建物跡からの遺物は古墳時代中期の土師器が中心で､須恵器は一点も出土しなかった。

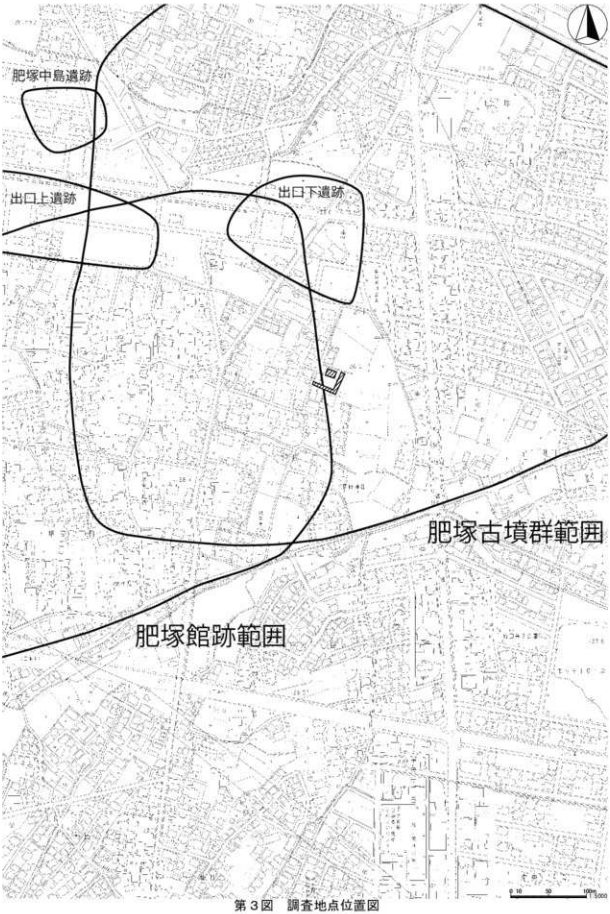
溝跡は２条検出され、１条は江戸後期以降のものであり、もう１条は時期不明である。なお、江戸後期以降の溝跡から鉄製の鈴が出土している。

土坑は、調査区の南西部に集中して検出された。平面形状は円形や楕円形を呈するものと長方形のものがある。いずれの土坑も江戸後期から末のものと思われ、１基が 18 世紀末以前で、他は 18 世紀末以降のものである。出土遺物は少ないが、江戸後期から末のものが多い。

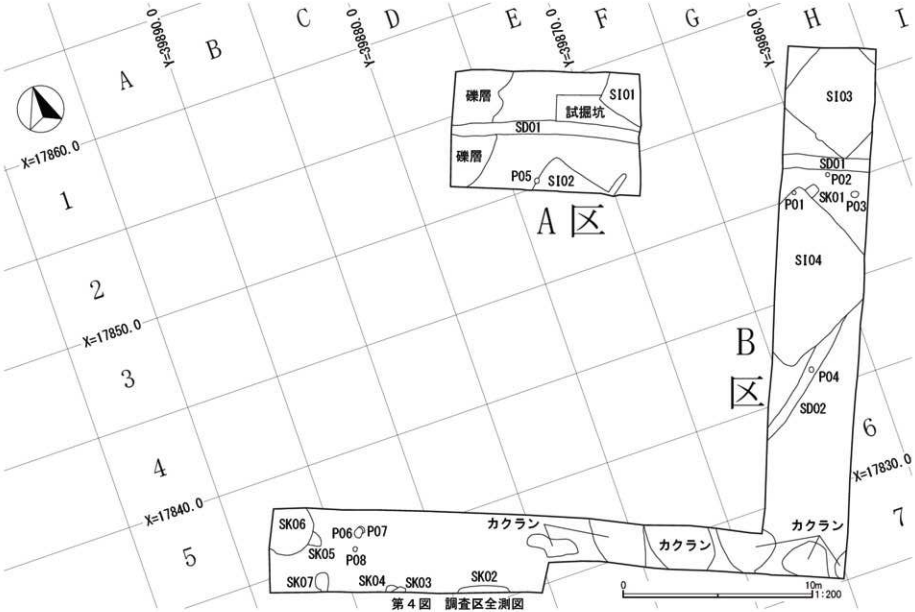
ピットは調査区に散在し規則性はなく、建物跡や柵列跡とは考えられなかった。いずれも出土遺物がなく時期は不明である。

遺構外出土遺物には、古墳時代前期・中期の土師器、江戸時代後期から末の陶磁器、近・現代の陶磁器がある。

なお、調査区周辺は肥塚古墳群･肥塚館跡とされているが、今回の調査では古墳は確認されず、また、中世の遺構・遺物等も確認されなかった。



第３図　調査地点位置図


A
B
C
D
E
F
G
H
I
Y=23890.0
Y=23880.0
Y=23870.0
Y=23860.0
X=17860.0
X=17850.0
X=17840.0
X=17830.0
1
2
3
4
5
6
7
礫層
SI01
試掘坑
SD01
礫層
P05
SI02
A 区
SI03
SD01
P02
P01
SK01
P03
SI04
B 区
P04
SD02
SK06
P06
P07
SK05
P08
SK07
SK04
SK03
SK02
カクラン
カクラン
カクラン
0
10m
1:200

第４図　調査区全測図

Ⅳ　遺構と遺物

1　竪穴建物跡

肥塚古墳群・肥塚館跡の調査では４棟の竪穴建物跡が確認され、全てが古墳時代中期（和泉期）のものであった。なお、出土した土器類は、全て土師器で須恵器は１点も出土していない。

第１号竪穴建物跡（第５・６図、第２表）

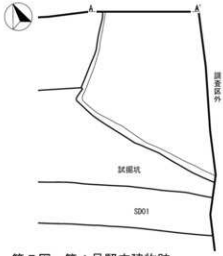
位置　Ｆ－２グリッドに位置する。

規模　竪穴建物跡の大半が調査区域外になっており、正確な規模は把握できなかった。確認された壁は北西と南西の２辺のみである。長軸 2.65 m以上、短軸 2.4 m以上、床面積 3.9 ㎡以上、確認面からの壁高は 0.28 mである。

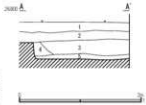
概要　北側と東側が調査区域外となる。平面形状は方形になるものと思われ、覆土は酸化鉄粒子を多量に含み自然堆積と思われる。壁溝及び柱穴は検出されなかったが、厚さ 0.1 mの貼床が確認されており、床面はほぼ平坦であった。遺物は集中した箇所は見られなかったが、床面直上で甕が１点出土している。なお、本遺構の南西 3.8 mに第２号竪穴建物跡が所在する。

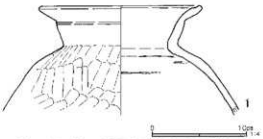
遺物　復元できたのは１の甕のみである。口縁部は斜め上方に立ち上がり、さらに外面がくびれて外折する。口縁部上方の内面が凹む。

時期　甕１点のみの出土であることから詳細は不明であるが、古墳時代中期と思われる。



第５図　第１号竪穴建物跡





第６図　第１号竪穴建物跡出土遺物

第２表　第１号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 甕	(17.4)	(11.5)	－	ABEHIK	橙	B	口縁～胴部 40%	外面：口縁横ナデ ヘラナデ 内面：口縁横ナデ 胴部横位ヘラナデ 内外面摩耗顕著及び調整不明瞭

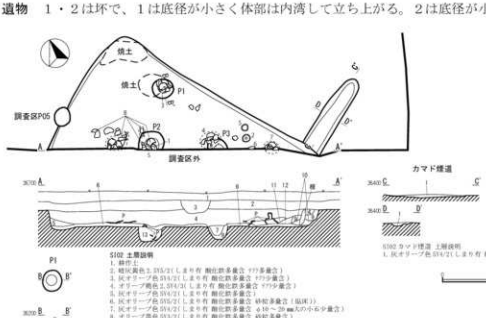
第２号竪穴建物跡（第７・８図、第３表）

位置　Ｅ－２・３、Ｆ－３グリッドに位置する。

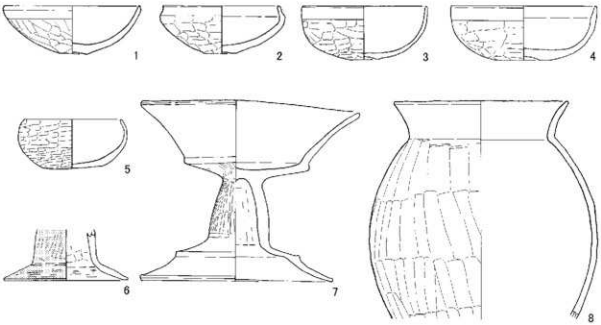
規模　竪穴建物跡の大半が調査区域外になっており、正確な規模は把握できなかった。確認された壁は北東と北西の２辺のみである。長軸3.82ｍ以上、短軸2.15ｍ以上、主軸方位はＮ－55°－Ｅである。床面積3.6㎡以上、確認面からの壁高は0.14ｍである。

概要　南西部が調査区域外となるが、平面形状は方形になるものと思われる。覆土は酸化鉄粒子を含み、レンズ状に堆積しているため概ね自然堆積と考えられる。カマドはそのほとんどが調査区域外のため詳細は不明であるが、カマド付近からは第８図７の高坏が逆位の状態で出土している。北東辺ではカマドの煙道が検出され、確認面での煙道の長さは壁から煙道部先端までが1.28ｍ、幅0.33ｍで内側全体が被熱していた。カマドが北東辺の中央に構築されていたと仮定すると、煙道基部の中央から北西隅角までの距離が3.48ｍのため北辺は約７ｍと考えられ、方形であれば第４号竪穴建物跡と同規模になる可能性がある。床面は平坦で厚さ0.1ｍの貼床が確認されたが、壁溝は確認されなかった。本遺構廃絶時のピットはＰ１～Ｐ３である。Ｐ１は北隅角付近で確認され、長軸0.35ｍ、短軸0.3ｍ、床面からの深さは0.1ｍで上層から同図３の埦と拳大の玉石が出土している。Ｐ２は長軸0.42ｍ、短軸0.28ｍ以上で大半が調査区域外となる。床面からの深さは0.28ｍで、出土遺物は同図１の坏及び本遺構出土の破片と接合した８の甕がある。なお、Ｐ２の上面に貼床が確認されたことから、Ｐ２に埋設された柱を抜き取った後に床を貼ったものと考えられる。Ｐ３はカマドの西側で確認され、長軸0.36ｍ以上、短軸0.17ｍ以上、床面からの深さは0.25ｍで大半が調査区域外となる。このピット直上から同図５の埦が出土している。また、調査時に本遺構の北西隅角付近で炭化材が混入した薄い焼土層が二箇所確認されたが、床面より上層であったことから、本遺構廃絶後の窪地を利用した焼却跡と見られる。遺物はカマドの西側と北西部に集中箇所があり、その大半は床面直上かそれに近い出土状況であった。

遺物　１・２は坏で、１は底径が小さく体部は内湾して立ち上がる。２は底径が小さく口縁部外面に



第７図　第２号竪穴建物跡



第８図　第２号竪穴建物跡出土遺物

稜を持ち、端部が内屈するものである。３～５は埴である。３・４は体部が下方から大きく内湾しながら立ち上がり口縁部がほぼ直立するもので、４の口縁部内面には稜がめぐる。５は体部下方から内湾して立ち上がり、さらに口縁部が内湾するものである。１・２・４は丁寧で重厚感がある作りである。６・７は高坏で、６は脚部の径が広く裾部が短いものである。７は坏部の口縁部が大きく外反して開き、明瞭な段を持つ。裾部は二段に開く。脚部の形状は縦長の台形である。８は口縁部が緩やかに外反する甕である。

重複　第５号ピットと重複し、本遺構が古い。

時期　古墳時代中期であるが、土器の形態から第３・４号竪穴建物跡より先行する。

第３表　第２号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	14.6	5.1	2.7	ABEHIK	明赤褐	B	100%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ削り 上げ底 内面：横ナデ 摩耗顕著 重厚感ある作り
2	土師器 坏	12.4	5.0	3.1	ACEHI	明赤褐	B	100%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨きに近いナデ 上げ底 内面：横ナデ 内外面摩耗顕著 重厚感ある作り
3	土師器 埦	13.3	5.6	3.0	ABCEHI	橙	B	90%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨きに近いナデ 上げ底 内面：横ナデ 外面やや摩耗 丁寧な作り
4	土師器 埦	15.4	5.7	5.5	ABCEHIKN	明赤褐	B	口縁～胴部 70%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラナデ 上げ底 内面：横ナデ 内外面摩耗顕著 重厚感ある作り
5	土師器 埦	10.3	5.2	6.3	ABIKN	赤褐	B	100%	外面：底部までヘラ磨き 底部を除き赤彩 内面：口縁横ナデ 以下ヘラ磨き 体部内面摩耗顕著 丁寧な作り
6	土師器 高坏	－	(5.3)	(13.2)	ABDEHIN	明赤褐	B	脚部 70%	外面：ヘラ磨き 赤彩（大半剥落） 脚部内面：ヘラナデ 裾部内面：ヘラ磨き 内外面摩耗顕著
7	土師器 高坏	23.1	19.0	20.3	AEIK	明赤褐	B	70%	外面：坏部横ナデ 脚部ヘラ磨き 裾部横ナデ 内面：坏部横ナデ 脚部ヘラナデ 裾部横ナデ 内外面所々に摩耗顕著
8	土師器 甕	18.4	(22.9)	－	ABHIKN	赤褐	B	口縁～胴部 70%	外面：口縁横ナデ 胴部ヘラナデ 内面：口縁横ナデ 脚部ヘラナデ 内外面摩耗顕著

第３号竪穴建物跡（第９～12図、第４・５表）

位置　Ｈ－２・３、Ｉ－２グリッドに位置する。

規模　遺構の東側・西側及び北側が調査区域外になっている。長軸・短軸共に4.84ｍ、床面積17.9㎡以上、確認面からの壁高は0.25ｍである。主軸方位はＮ－112°－Ｗを示す。

概要　平面形状は方形で、覆土はレンズ状の堆積をしていた。壁溝及び貼床は確認できなかった。カマドは南西辺の中央よりやや南側に付設され、燃焼部は壁外に0.25ｍ突出する。燃焼部内の火床面に被熱痕が見られ、袖部上面には焼土が確認された。袖は両袖とも遺存し灰オリーブ土で構築されていた。煙道は本来であれば南西側に延びていたものと思われるが、調査段階ではそれは確認できなかった。カマド内からは裾部を欠く第11図８の高坏が、逆位の状態で出土している。貯蔵穴は南隅角付近で確認され、長軸0.65ｍ、短軸0.58ｍ、床面からの深さ0.2ｍを測り、同図７の埦と19の壺、本遺構出土の破片と接合した24の甕が出土している。柱穴は本来４基と思われ、そのうちの３基が確認されている。Ｐ１はカマドの北1.8ｍにあり長軸0.33ｍ、短軸0.3ｍ、床面からの深さは0.17ｍ。Ｐ２は北隅角付近にあり長軸0.45ｍ、短軸0.27ｍ、床面からの深さは0.37ｍ。Ｐ３は貯蔵穴の北側にあり長軸0.35ｍ、短軸0.25ｍ、床面からの深さは0.45ｍをそれぞれ測る。いずれのピットの覆土も暗オリーブ・オリーブ黒色土で小石が含まれていた。ちなみに、Ｐ１－Ｐ２間が2.5ｍ、Ｐ１－Ｐ３間は2.65ｍを測る。

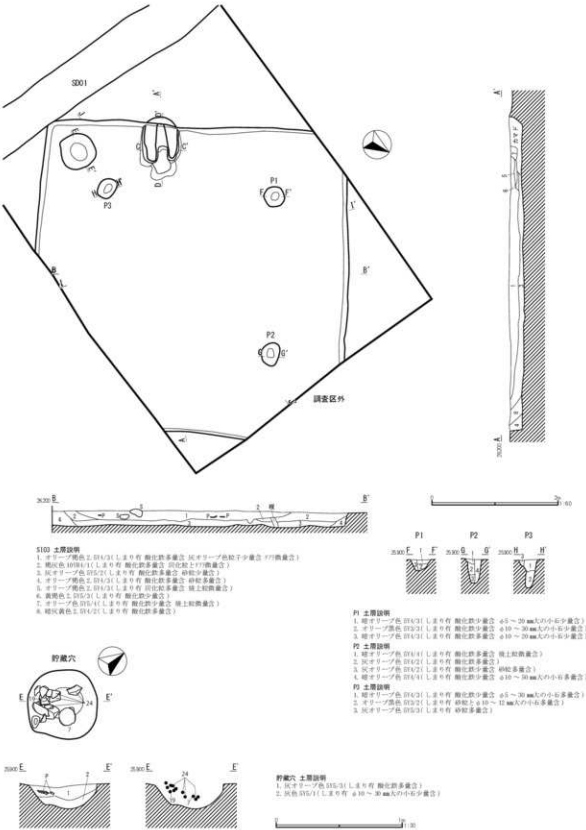
なお、本遺構からは人頭大から拳大の礫が大量に見つかり、これに混じって多量の坏・埦・高坏・壺・甕が出土している（第10図）。これらは覆土の第１層から確認されているものが多いことから、本遺構廃絶後、窪地となったところに廃棄されたものと思われる。さらに、遺物の出土状況を見ると、南西隅角周辺と北西辺中央付近には遺物の空白部分がある。このことから、多量の礫や土師器は南西辺カマドの北側と、その反対側の北東辺から投棄されたものと考えられる。

遺物　１・２は坏である。体部は下方から内湾して立ち上がり口縁部でほぼ直立する。２は第２号竪穴建物跡出土の第８図１に類似する。３～７は埦である。３は口縁部が内傾するもの。４～７は体部が下方から内湾気味に立ち上がり、口縁部で短く外折するものである。７は貯蔵穴出土で、口縁部内面が凹み口唇部が上方に尖る。８～16は高坏である。８・９の坏部は直線的に開き、10はやや内湾気味に開く。いずれも坏部外面に稜を持つ。８はカマドから出土した。11～16は高坏の脚部である。11は裾部が二段に開くもので、第８図７の第２号竪穴建物跡出土高坏に類似する。14・16の脚部内面には輪積み痕が残る。８・12～15の脚部の形状は縦長の台形で、16は筒形に近い。17～23・26・27は壺である。17・18は頸部が「く」の字に屈曲するもので、18は口縁端部が外反する。19・20は小壺で、19の口縁部は頸部より直線的に開く。21～23は底部で、上げ底である。24～28は甕で、24・25の口縁部は頸部より外反して開き、25は口縁部上方が外折する。26～28は底部で、26・27は壺、28は甕である。29は無頸壺で、口縁部に２箇所焼成前の貫通孔がある。30･31は手捏ねのミニチュア土器である。

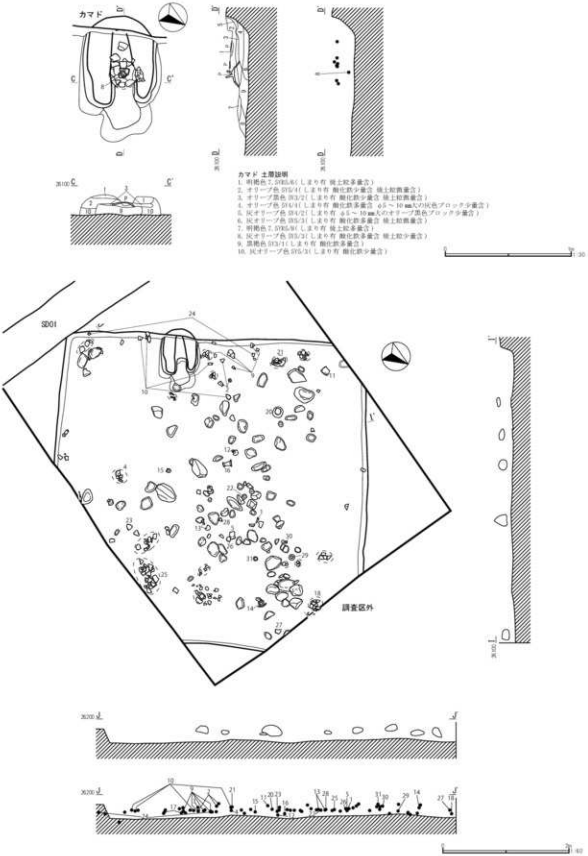
なお、本遺構から出土した高坏脚部が、第４号竪穴建物跡出土の脚部（第15図19）と接合した。

重複　南隅角で第１号溝跡と重複し、本遺構が古い

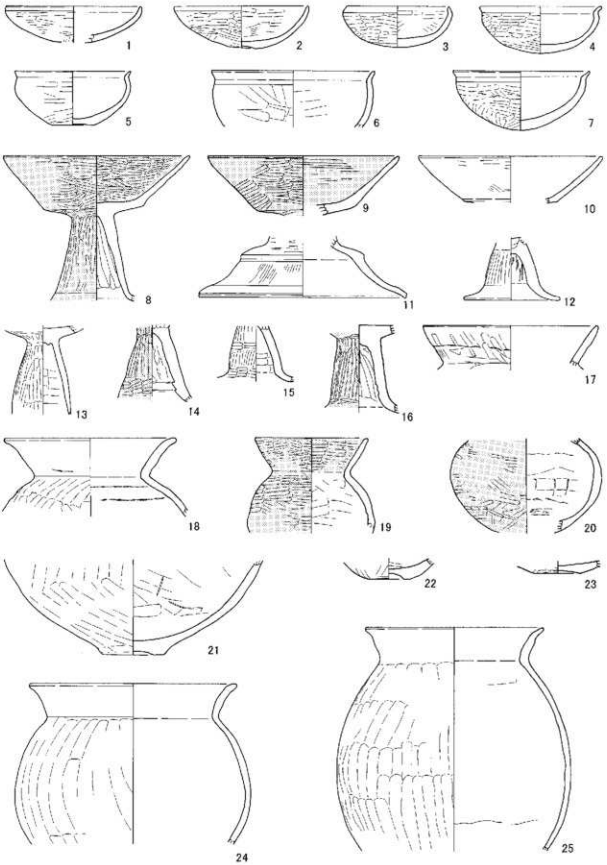
時期　古墳時代中期で、第２号竪穴建物跡より後出する。



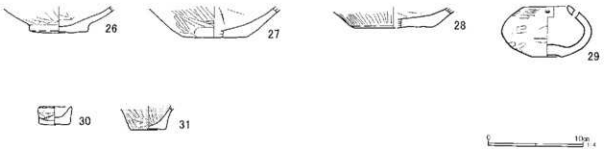
第９図　第３号竪穴建物跡（１）



第 10 図　第 3 号竪穴建物跡（2）



第11図　第3号竪穴建物跡出土遺物（1）



第 12 図　第３号竪穴建物跡出土遺物（２）

第４表　第３号竪穴建物跡出土遺物観察表（１）

No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	(14.4)	(3.8)	－	ABDHIN	明赤褐	B	口縁～底部 40%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 内面：口縁横ナデ 内外面摩耗顕著
2	土師器 坏	(14.2)	4.5	3.0	ADIKN	明赤褐	B	口縁～底部 50%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 上げ底 内面：ヘラ磨き 内外面摩耗顕著
3	土師器 椀	(11.6)	4.3	－	ABDEIK	明赤褐	B	60%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 内面：口縁横ナデ 体部～底部ヘラ磨き 内外面摩耗顕著 やや重厚感ある作り
4	土師器 椀	12.9	5.0	－	ABCIKN	橙	B	ほぼ完形	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 内面：口縁横ナデ 体部～底部ヘラ磨きカ 内外面摩耗顕著 重厚感ある作り
5	土師器 椀	(12.2)	5.7	(4.5)	ABDEHIKN	明赤褐	B	40%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 上げ底 内面：口縁横ナデ 体部～底部不明 内外面摩耗顕著
6	土師器 椀	(17.2)	(5.9)	－	ABHIN	暗赤褐	B	口縁～体部 20%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラナデ 内面：口縁横ナデ 体部ヘラナデ
7	土師器 椀	14.4	6.3	－	ABEGIN	橙	B	ほぼ完形	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 輪積痕有 内面：口縁～底部横ナデ 体部～底面アバタ状剥離顕著 貯蔵穴出土
8	土師器 高坏	19.8	(15.3)	－	ABDHN	橙	B	坏部・脚部ほぼ完形	外面：坏部・脚部ヘラ磨き 内面：坏部ヘラ磨き 脚部ヘラナデ 坏部内面～外面脚部赤彩 脚部ほぼ剥落 カマド出土
9	土師器 高坏	20.2	(6.3)	－	ABEGIN	赤	B	坏部 80%	外面：坏部ヘラ磨き 赤彩 内面：坏部ヘラ磨き 赤彩 赤彩外面一部、内面剥落顕著
10	土師器 高坏	(19.5)	(4.9)	－	ABDIK	橙	B	坏部 40%	外面：ヘラ磨き 内面：ヘラ磨きヵ 内外面摩耗顕著
11	土師器 高坏	(22.0)	(6.5)	－	ABDIK	明赤褐	B	裾部 30%	外面：裾部下方及び段部横ナデ 裾部及び脚部ヘラ磨き 内外面摩耗顕著
12	土師器 高坏	－	(6.6)	(10.2)	AEIK	明赤褐	B	脚部 70%	外面：接合部及び裾部 横ナデ 内面：ヘラナデ
13	土師器 高坏	－	(9.3)	－	ABHK	明赤褐	B	接合部～脚部 70%	外面：ヘラ磨き 内面：ヘラナデ 内外面摩耗顕著
14	土師器 高坏	－	(8.1)	－	ABEIKN	明赤褐	B	脚部 70%	外面：ヘラ磨き 赤彩やや剥落 内面：ヘラナデ
15	土師器 高坏	－	(5.8)	－	ABEIKN	明赤褐	B	脚部 70%	外面：ヘラ磨き 内面：ヘラナデ
16	土師器 高坏	－	(9.2)	－	ABDEIK	橙	B	接合部～脚部 90%	外面：ヘラ磨き 赤彩 大半剥落 内面：ヘラナデ
17	土師器 壺	(18.5)	(4.6)	－	ABCHIKN	橙	B	口縁部～頸部 30%	外面：口縁部横ナデ後、所々縦位ヘラナデ 頸部ヘラナデ 輪積痕有 内面：口縁部ヘラナデ 貯蔵穴出土
18	土師器 壺	18.3	(8.2)	－	ABEHIN	明赤褐	B	口縁～胴上部 90%	外面：口縁部横ナデ輪積痕有 胴部ヘラナデ 内面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ？輪積痕有 内外面摩耗顕著
19	土師器 壺	(12.0)	(10.0)	－	AEHI	にぶい赤褐	B	口縁～胴部 30%	外面：ヘラ磨き 内面：口縁～頸部ヘラ磨き 胴部ヘラナデ 口縁部内面から外面赤彩
20	土師器 壺	－	(9.9)	－	ABDEIK	明赤褐	B	胴部 100%	外面：上方ヘラ磨き 下方ヘラ削り主体 赤彩大半剥落 摩耗顕著 内面：ヘラナデ輪積痕有
21	土師器 壺	－	(10.0)	6.6	ADGI	黄褐	C	胴部～底部 40%	外面：ヘラナデ 上げ底 摩耗顕著 内面：ヘラナデ

第５表　第３号竪穴建物跡出土遺物観察表（２）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
23	土師器 壺	－	(1.3)	4.8	ABDEIN	外面：橙 内面：褐灰	B	底部	外面：ヘラ磨き 上げ底
24	土師器 壺	－	(2.2)	4.8	ACEHIKN	明赤褐	B	底部 100%	外面：ヘラ磨き 上げ底 内面：ヘラナデ？ 内外面摩耗顕著
24	土師器 甕	(21.8)	(16.9)	－	ABDEIKN	にぶい橙	B	口縁～胴部 40%	外面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ 内面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ？ 内外面摩耗顕著 貯蔵穴出土
25	土師器 甕	(18.8)	(23.7)	－	ABDEGHIKN	にぶい赤褐	B	口縁～胴部 40%	外面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ 内面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ 輪積痕有 内外面摩耗顕著、特に内面
26	土師器 壺	－	(2.8)	6.2	AEIKN	明赤褐	B	底部ほぼ 100%	外面：ヘラナデ 内面：ヘラナデ 内外面摩耗顕著
27	土師器 壺	－	(3.3)	(7.0)	ABDIN	外面：にぶい赤褐 内面：にぶい橙	B	底部 30%	外面：ヘラ磨き 底部付近ヘラ削り 内面：ヘラナデ
28	土師器 甕	－	(2.1)	(7.8)	ABCDEIN	橙	B	底部 30%	外面：ヘラナデ 内面：ヘラ磨き
29	土師器 無頸壺	4.6	5.4	3.0	ABEIKN	橙	B	100%	外面：ヘラ磨き 上げ底 内面：ヘラナデ？ 口縁部にほぼ対角線上に穿孔有
30	土師器 ミニチュア土器	3.6	1.9	3.2	ABCEKN	橙	B	100%	外面：ヘラナデ 輪積痕有 内面：ヘラナデ
31	土師器 ミニチュア土器	－	(2.5)	3.7	ADEKN	橙	B	体部～底部 90%	外面：ヘラ磨き 内面：ヘラ磨き 内外面赤彩 ほとんど剥落

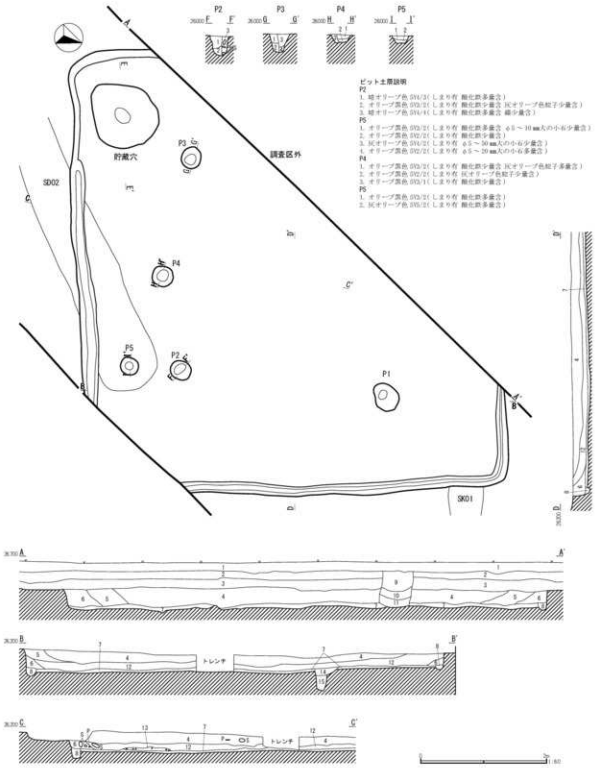
第４号竪穴建物跡（第13～16図、第６表）

位置　Ｇ－３～５、Ｈ－４・５グリッドに位置する。

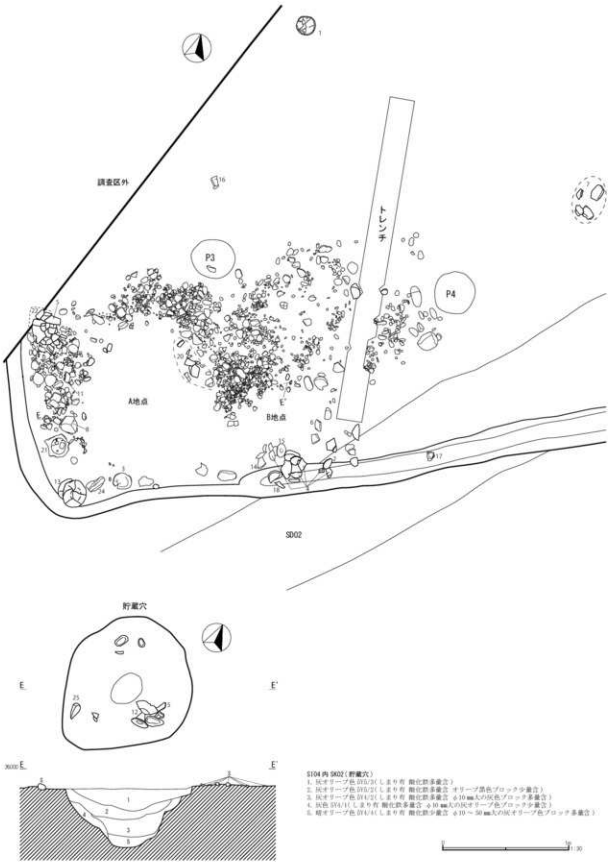
規模　竪穴建物跡の東側と西側が調査区域外になっている。長軸7.09ｍ、短軸6.6ｍで、床面積26㎡以上、確認面からの壁高は0.26ｍである。主軸方位はＮ－112°－Ｗを示す。

概要　平面形状は方形に近いものと思われ、覆土は酸化鉄粒子を多量に含みレンズ状の堆積をしていることから自然堆積と考えられる。壁溝は北辺・東辺・南辺で確認され、南辺の南西隅角付近を除いて全周するものと思われる。床面は平坦で厚さ0.07ｍの貼床が確認された。カマドは今回の調査では検出されなかったが、平成29年11月に実施した試掘調査では本遺構の北西側でカマドの煙道が確認されていることから、北西側の調査区域外にカマドが存在することが判明している。

本遺構の南西隅角から北東に3.3ｍ、南壁から1.7～2.0ｍの範囲で、拳大から親指大、及び小指大の石が床面上に敷かれた状態で検出され（第14図）、埦・高坏・壺・甕などが出土している。また、石が敷かれていない空白の部分が２箇所確認されている。１箇所目は南西隅角付近で見つかったもので、直径約１ｍの円形を呈していた（以下、Ａ地点とする）。また、ここは床面下から貯蔵穴が見つかった場所でもある。Ａ地点の中央部では遺物は確認されていないが、その周囲から第15図３の坏、同図13の高坏、貯蔵穴出土の破片と接合した８・11の高坏、20・21の壺、22の甕が出土している。なお、Ａ地点の南側の南西隅角付近から見つかった３の坏と13の高坏は、正位の状態で出土した。もう１箇所の空白部分はＡ地点の東側に隣接し、半径約0.5ｍの半円形に確認された（以下、Ｂ地点とする）。Ｂ地点はＡ地点のような広い遺物の空白部はなかったが、ここからは第15図４・６の埦、９・14・15・18の高坏や拳大の石が折り重なるような状態で検出され、そのほとんどが床面直上から出土した。なお、Ｂ地点においても下部に遺構が存在すると考えトレンチ調査を実施したが、下部に遺構は確認されなかった。貯蔵穴は、前述のようにＡ地点の下層から検出され、長軸1.18ｍ、短軸1.02ｍ、床面からの深さ0.49ｍを測る。覆土は多量の酸化鉄を含む灰オリーブ・灰色土で、その断面はＶ字に近い形状



第 13 図　第 4 号竪穴建物跡（1）



第 14 図　第４号竪穴建物跡（２）

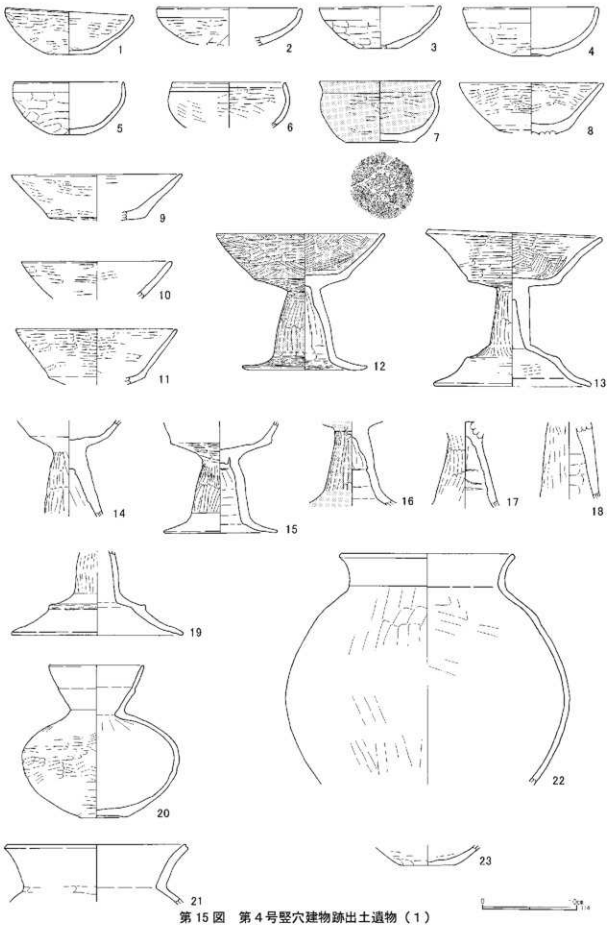
である。ここからは本遺構出土の破片と接合した５の埦、同じく本遺構出土の破片と接合した８・11の高坏、及び12の高坏が出土している。柱穴は、廃絶時の５基が確認された。Ｐ１は北東隅角付近にあり長軸0.47ｍ、短軸0.37ｍ、床面からの深さ0.36ｍ。Ｐ２は南辺の東側壁から北へ1.5ｍにあり、長軸0.35ｍ、短軸0.28ｍ、床面からの深さ0.31ｍ。Ｐ３は貯蔵穴の北側にあり、長軸0.35ｍ、短軸0.3ｍ、床面からの深さ0.30ｍである。Ｐ４は南辺のほぼ中央の壁から北へ1.3ｍにあり、長軸0.34ｍ、短軸0.32ｍ、床面からの深さ0.13ｍである。Ｐ５はＰ２と同じく南辺の東側壁から北へ0.9ｍにあり、長軸0.29ｍ、短軸0.26ｍ、床面からの深さ0.11ｍをそれぞれ測る。全てのピット覆土は暗オリーブ・オリーブ黒土で小石を含む。これら柱穴のうち、Ｐ１・２・３が深さ0.30ｍ以上であることから、この３基が主柱の柱穴で、もう１基は本遺構北西側の調査区域外に所在するものと思われる。ちなみに、Ｐ１－Ｐ２間が3.27ｍ、Ｐ２－Ｐ３間は3.38ｍを測る。

遺物　１～３は坏で、体部は底部より緩やかに内湾するものである。１は口唇部が上方に尖り、２は口縁部がほぼ直立する。３は口縁部が若干外反する。４～７は埦である。４・５は体部が下方から大きく内湾して立ち上がり口縁部がほぼ直立するもので、器形は第２号竪穴建物跡出土の第８図３に類似する。６は体部が下方から内湾して立ち上がり、口縁部でさらに内湾し口唇部が短く直立する。７は体部下方から内湾して立ち上がり口縁部で短く外折するもので、底部外面には工具による楕円形の刺突痕が残る。８～19は高坏である。８・９・11の坏部は直線的に開き、11は口縁部で若干内湾する。10・12は口縁部が内湾気味に開くものである。13は口縁部上方がやや外反し端部の断面は方形に近く、裾部が二段に開く。９・11～13はいずれも坏部外面に稜を持つ。14～19は脚部である。15は坏部外面に稜を持ち、14は僅かに稜を持つ。16・17は内面に巻上げ法による輪積み痕が残る。19の裾部は13同様二段に開くもので、第３号竪穴建物跡出土の高坏脚部と接合した。12・14～17・19の脚部の形状は縦長の台形で、13・18は筒形に近い。20・21は壺である。20の口縁部は頸部より直線的に開く二段口縁で、最大胴径は体部のほぼ中央にある。21は頸部が「く」の字に屈曲し口縁端部がやや外反するもので、口縁部上方の内面が若干くぼむ。また、口唇部の断面は方形に近く端面にくぼみが巡る。22・23は甕である。22の胴部は球形に近く、口縁部は頸部より緩やかに外反する。23は底部である。24・25は凝灰岩製の砥石で、24には刃物痕が残り、側面に磨り痕が残る。25は側面に一部磨り痕が残る。いずれも遺物取り上げや水洗いの際、角が崩れるほど脆弱な状態であった。なお、24は正位の状態で出土した３の坏と13の高坏の間で出土し、25は貯蔵穴出土である。

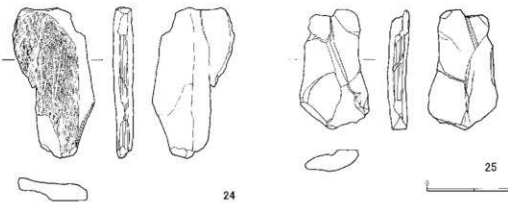
本遺構の遺物は、南西部で確認された敷石と南壁の間から出土したものがほとんどで、なかでも図化できた12個体の高坏のうち、８・９・11・13～15・18の７個体がここから出土し、また、同様に図化できた坏・埦、合せて７個体のうち２～６の５個体がここから出土している。このことから本遺構の遺物は南西部に偏って出土している傾向が窺える。

重複　北東隅角付近で第１号土坑、及び第１号ピットと重複し、南辺で第２号溝跡と重複する。いずれの遺構よりも本遺構が古い。

時期　古墳時代中期で、第２号竪穴建物跡より後出する。



第 15 図　第 4 号竪穴建物跡出土遺物（1）



第 16 図　第４号竪穴建物跡出土遺物（２）

第６表　第４号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器 坏	13.5	4.9	5.4	AEIKN	明赤褐	B	100%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 内面：ヘラ磨き
2	土師器 坏	(15.4)	(3.9)	－	ABDIK	明赤褐	B	30%	外面：口縁横ナデ 体部上方ヘラ磨き 下方ヘラナデ 内面：横ナデ 内外面摩耗顕著
3	土師器 坏	13.0	4.4	4.1	ABDIKN	明赤褐	C	ほぼ完形	外面：口縁横ナデ 体部ヘラナデ 内面：横ナデ
4	土師器 甕	14.4	5.1	3.5	ABDIK	明赤褐	B	80%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラナデ 上げ底 内面：横ナデ 内外面摩耗顕著
5	土師器 甕	(12.0)	5.6	3.5	ABDEIKN	外面：橙 内面：にぶい赤褐	B	50%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラナデ 内面：横ナデ 内外面摩耗顕著 貯蔵穴
6	土師器 甕	(12.0)	(4.8)	－	ABCIKN	暗赤褐	B	30%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 内面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 内外面摩耗顕著
7	土師器 甕	(12.8)	6.4	7.2	ABDIK	明赤褐	B	70%	外面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 上げ底 内面：口縁横ナデ 体部ヘラ磨き 底部を除き赤彩
8	土師器 高坏	15.2	(5.4)	－	ABCDEHIKN	明赤褐	B	坏部ほぼ完形	内外面：ヘラ磨き 摩耗顕著 貯蔵穴出土
9	土師器 高坏	(18.0)	4.9	－	ADIKN	橙	B	坏部 40%	内外面：ヘラ磨き 摩耗顕著
10	土師器 高坏	(15.9)	3.9	－	ABDIKN	にぶい褐	B	坏部 30%	外面：体部ヘラ磨き 内外面摩耗顕著
11	土師器 高坏	(17.0)	(5.8)	－	ABEIKN	外面：明赤褐 内面：にぶい赤褐	B	坏部 40%	内外面：ヘラ磨き 内外面摩耗顕著 貯蔵穴出土
12	土師器 高坏	17.8	14.4	13.2	ABDIK	明赤褐	B	ほぼ完形	外面：ヘラ磨き 内面：坏部・裾部ヘラ磨き 脚部ヘラナデ 坏部内面から裾端部まで赤彩 貯蔵穴出土
13	土師器 高坏	18.8	16.5	16.6	ADEGHN	橙	B	ほぼ完形	外面：ヘラ磨き 内面：坏部・裾部ヘラ磨き 脚部ヘラナデ
14	土師器 高坏	－	(10.1)	－	ABIKN	橙	B	坏部～脚部 60%	外面：ヘラ磨き 内面：脚部ヘラナデ
15	土師器 高坏	－	(11.7)	(12.0)	ABCIKN	明赤褐	B	坏部～裾部 70%	外面：坏部・裾部横ナデ 脚部ヘラ磨き ヘラ磨き前のハケメー部残存 内面：坏部横ナデ 脚部上方ヘラナデ 以下裾部まで横ナデ
16	土師器 高坏	－	(8.8)	－	ABDIKN	橙	B	接合部～脚部 70%	外面：ヘラ磨き 赤彩 内面：ヘラナデ 軸積痕有
17	土師器 高坏	－	(8.9)	－	ABDHN	橙	B	接合部～脚部 70%	外面：ヘラ磨き 内面：ヘラナデ 軸積痕有
18	土師器 高坏	－	(8.0)	－	ABDIKN	明赤褐	B	脚部 70%	外面：ヘラ磨き 内面：ヘラナデ 内外面摩耗顕著
19	土師器 高坏	－	(8.9)	(18.0)	ABDEK	橙	B	脚部～裾部 30%	外面：ヘラ磨き 図に横ナデ前のハケメ残存 裾部横ナデ 内面：横ナデ
20	土師器 甕	10.0	16.1	4.5	ABEIK	明赤褐	B	ほぼ完形	外面：口縁部横ナデ 胴部ヘラ磨き 内面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ
21	土師器 甕	19.4	(6.3)	－	ABDEHIKMN	外面：灰褐 内面：にぶい褐	B	口縁部ほぼ完形	外面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ 内面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ
22	土師器 甕	(18.6)	(24.3)	－	ABDEHIKN	橙	B	口縁部～胴下部	外面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ 内面：口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ
23	土師器 甕	－	(2.1)	(6.2)	ADHIN	明赤褐	B	底部 30%	内外面：ヘラナデ
24	石製品 紡石	現存長　15.9　最大幅　8.7　重量　280g							凝灰岩
25	石製品 紡石	現存長　12.5　最大幅　7.1　重量　210g							凝灰岩 貯蔵穴出土

2　溝　跡

本調査では２条の溝跡が確認されている。

第１号溝跡（第17・20図１・２、第７表）

位置　D～F－２、G・H－３グリッドに位置する。

規模　検出長は13.6ｍ、幅は0.5～0.7ｍを測る。確認面からの深さは0.25～0.35ｍで、主軸方位はN－65°－Wである。

概要　北西－南東方向の流れをもち、断面は北西側がU字状、南東側が逆台形状で、覆土最上層に浅間Aテフラが確認された。中層から下層には酸化鉄粒子を多量に含み、覆土はレンズ状堆積のため自然堆積と考えられる。本遺構は東側のH－３グリッド付近では、遺跡の基盤となる灰オリーブ土を掘り込んでいたが、E－２グリッド付近では基盤層の灰オリーブ土とその下層にある礫層を掘り込んでいた。また、西側のD－２グリッドでは基盤層の灰オリーブ土が無いため礫層を掘り込んでいることが確認されている。溝底面の標高はD－２グリッドの西端で25.935ｍ、F－２グリッドの東端で25.881ｍ、G－３グリッドの西端で25.846ｍ、H－３グリッドの東端で25.761ｍとなっており、本遺構の最西端と最東端の比高は0.174ｍあり、溝底面が西から東へ向かって緩やかに下っていることが判明した。

遺物　１は土師器甕の底部である。２は鉄鈴でほぼ完形である。形は円形に近いがやや下膨れで、紐等を通す鈕の一部を欠く。中には鉄製の丸が残る。

重複　第３号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。

時期　覆土に浅間Aテフラを含むことから、18世紀末以降である。

第２号溝跡（第18・20図３、第７表）

位置　F－６、G－５・６、H－５グリッドに位置する。

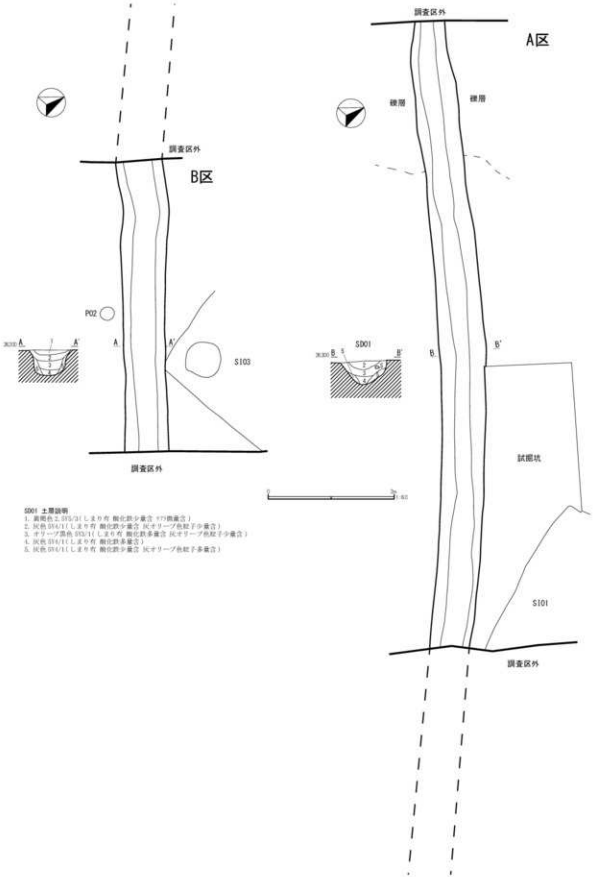
規模　検出長は9.6ｍ、幅は0.48～0.95ｍを測る。確認面からの深さは0.08～0.17ｍで、主軸方位はN－50°－Eである。

概要　北東－南西方向の流れで、断面は平凸レンズ状である。覆土中層から下層には酸化鉄粒子を多量に含むが、浅間Aテフラは検出されなかった。覆土はレンズ状堆積のため自然堆積と考えられる。本遺構はH－５グリッドで完結する。また、溝跡が南西方向に延びるものと考えられたため、E－７グリッド付近で遺構確認を行ったが、攪乱の範囲が広かったため延長部は検出できなかった。溝底面の標高はF－６グリットの南西端で26.055ｍ、G－５グリッドの本遺構内の調査区第４号ピット付近で25.957ｍ、G－５グリッドの北東端で25.926ｍとなっており、本遺構の最南西端と最北東端の比高は0.129ｍあり、溝底面は南西から北東へ向かって緩やかに下っていることが判明した。

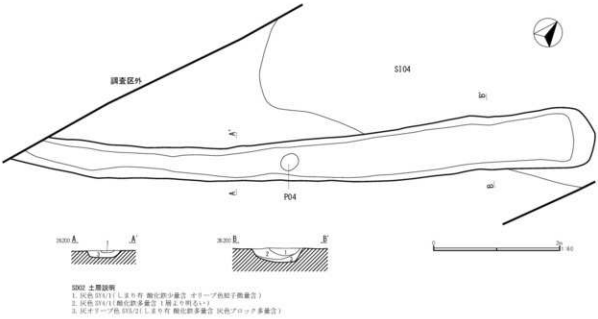
遺物　３の土師器壺の底部が出土した。

重複　第４号竪穴建物跡・第４号ピットと重複し、本遺構が新しい。

時期　覆土に浅間Aテフラを含まないため、18世紀末以前と考えられる。


調査区外
B区
P02
A
A'
S103
調査区外
SD01 土層説明
1. 黒褐色土 (2.5Y3/1 しまりあり 酸化鉄少量含 ¹⁷Fl微量含)
2. 灰色 (5Y4/1 しまりあり 酸化鉄少量含 灰オリーブ色粒子少量含)
3. オリーブ黒色 (5Y3/1 しまりあり 酸化鉄多量含 灰オリーブ色粒子少量含)
4. 灰色 (5Y4/1 しまりあり 酸化鉄多量含)
5. 灰色 (5Y4/1 しまりあり 酸化鉄少量含 灰オリーブ色粒子多量含)
調査区外
A区
検層
検層
SD01
B
B'
試掘坑
S101
調査区外

第 17 図　第 1 号溝跡



第 18 図　第２号溝跡

3　土　坑

本調査では７基確認され、調査区の南西部に集中する傾向がある。

第１号土坑（第 19 図）

位置　G－３・４、H－３・４グリッドに位置する。

規模　長軸0.92 m、短軸0.57 m、確認面からの深さは0.22 mを測る。主軸方位はN－70°－Eである。

概要　平面形状は長方形である。断面は幅広のU字状で覆土に酸化鉄粒子を多量含み、上層に浅間Aテフラを微量含む。

遺物　遺物は出土しなかった。

重複　西側で第４号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。

時期　覆土に浅間Aテフラを含むことから、18 世紀末以降である。

第２号土坑（第 19・20 図４、第７表）

位置　C－６グリットに位置する。

規模　長軸 2.8 m以上、短軸 0.4 m以上、確認面からの深さは 0.45 m以上である。主軸方位はN－71°－Wと思われる。

概要　大部分が調査区域外になるため平面形状は不明である。断面は平凸レンズ状で、覆土はレンズ状堆積のため自然堆積と考えられる。覆土の最上層に浅間Aテフラ・酸化鉄粒子を多量含み、中層にはφ30 ～ 10 ㎜の黄褐色土ブロックを多量含む。また、各層で拳大から親指大の礫を多量含む。

遺物　４の砥石が出土した。このほか図化できなかったが、京焼系陶器の半球形碗とほうろくの細片が出土している。

重複　単独の遺構である。

時期　覆土に浅間Aテフラを含むことから、18 世紀末以降である。

第３号土坑（第 19 図）

位置　B－6 グリットに位置する。

規模　長軸 0.6 m以上、短軸 0.37 m以上、確認面からの深さ 0.3 mである。主軸方位はN－ 80°－Eと思われる。

概要　大部分が調査区域外になるため平面形状は不明であるが、検出された部分から楕円形を呈するものと考えられる。断面は平凸レンズ状で、覆土がレンズ状堆積のため自然堆積と考えられる。覆土の最上層に浅間Aテフラ・酸化鉄粒子を多量含み、下層に ø20 ～ 10 ㎜の小石を含む。

遺物　遺物は出土しなかった。

重複　西側で第４号土坑と重複し、本遺構が新しい。

時期　覆土に浅間Aテフラを含むことから、18 世紀末以降である。

第４号土坑（第 19 図）

位置　B－6 グリットに位置する。

規模　長軸 0.32 m以上、短軸 0.2 m以上、確認面からの深さ 0.2 mである。主軸方位はN－ 35°－Wと思われる。

概要　平面形状は遺構の大部分が調査区域外になるため不明である。断面は幅広のU字状で、覆土には酸化鉄粒子を多量含み、上層には ø30 ㎜の小石を含む。

遺物　遺物は出土しなかった。

重複　東側で第３号土坑と重複し、本遺構が古い。

時期　重複する第３号土坑が 18 世紀末以降であり、本遺構の覆土に浅間Aテフラを含まないことから、18 世紀末以前である。

第５号土坑（第 19 図）

位置　A－5 グリッドに位置する。

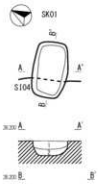
規模　長軸 0.98 m、短軸 0.75 m、確認面からの深さ 0.12 mである。主軸方位はN－ 45°－Wである。

概要　平面形状は不整楕円形で、断面は平凸レンズ状である。覆土には酸化鉄粒子を多量、浅間Aテフラ・ø30 ～ 10 ㎜の小石を含む。

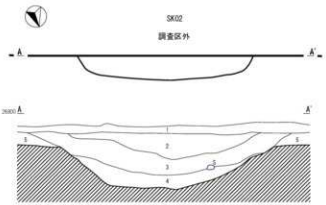
遺物　遺物は出土しなかった。

重複　西側で第６号土坑と重複し、本遺構が新しい。

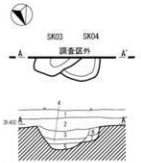
時期　重複する第６号土坑が 19 世紀前半のため、19 世紀後半以降と思われる。



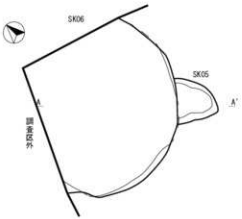
SK01 土層説明
1. 灰オリーブ色 5Y5/2(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘ微量含)
2. 灰色 5Y4/1(しまり有 酸化鉄多量含 砂粒少量含)



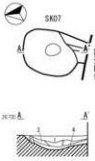
SK02 土層説明
1. 盛土
2. 暗オリーブ色 5Y4/3(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘ多量含 小石少量含)
3. 灰色 5Y4/1(酸化鉄多量含 φ10～30㎜大のにぶい黄橙色ブロック多量含)
4. オリーブ黒色 5Y3/1(粘性有 酸化鉄多量含)
5. 暗灰黄色 2.5Y5/3(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘ多量含)



SK03・04 土層説明
1. 盛土
2. 暗灰黄色 2.5Y5/3(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘ多量含)
3. 灰オリーブ色 5Y4/3(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘ少量含)
4. オリーブ黒色 5Y3/1(しまり有 酸化鉄多量含)
5. 灰オリーブ色 5Y5/3(しまり有 酸化鉄多量含 φ10～30㎜大の小石とφ5㎜大の灰色ブロック少量含)
6. 灰色 5Y5/1(しまり有 酸化鉄多量含 φ30㎜大の小石少量含)
7. 灰色 5Y4/1(しまり有 酸化鉄多量含)



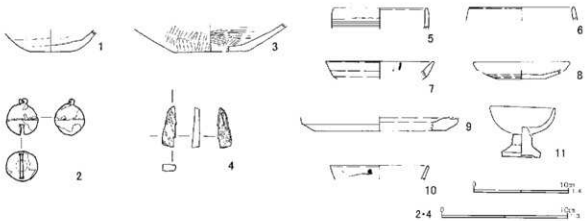
SK05・06 土層説明
1. 暗オリーブ色 5Y4/3(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘとφ10～30㎜大の小石少量含)
2. 灰オリーブ色 5Y5/2(しまり有 酸化鉄少量含 ｱﾌﾘ多量含)
3. 灰オリーブ色 5Y5/2(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘ多量含 φ10～150㎜大の小石少量含)
4. オリーブ黒色 5Y3/1(しまり有 酸化鉄多量含 φ10～90㎜大の小石少量含)
5. 灰オリーブ色 5Y5/2(しまり有 酸化鉄多量含 φ10～20㎜大の小石少量含 ｱﾌﾘ微量含)
6. 灰オリーブ色 5Y4/1(しまり有 砂粒とφ5～30㎜大の小石多量含)



SK07 土層説明
1. オリーブ黒色 5Y3/1(粘性有 酸化鉄多量含 砂粒少量含)
2. 灰色 5Y4/1(しまり弱 酸化鉄少量含 砂粒少量含)
3. オリーブ黒色 5Y3/1(しまり有 酸化鉄少量含 ｱﾌﾘを主体とする)
4. オリーブ黒色 5Y3/2(しまり有 酸化鉄多量含 ｱﾌﾘを主体とする 最上部に薄い灰色粘土層)
5. 灰色 5Y4/1(しまり有 ｱﾌﾘを主体とし、φ10㎜大のオリーブ黒色ブロック少量含)

0 2m 1:60

第19図 土 坑



第 20 図　溝跡・土坑出土遺物

第７表　溝跡・土坑出土遺物観察表

遺構	No	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
SD01	1	土師器 甕	－	(2.3)	(5.0)	ACDIN	橙	B	底部 25%	内外面：ヘラナデ
SD01	2	鉄製品 鉄鈴	現存長　5.8　最大幅　4.9　重量　6.7g					－	ほぼ完形	内部に鉄製の丸が残存する。
SD02	3	土師器 甕	－	(2.8)	(8.0)	ABDIKN	外面：灰褐 内面：橙	B	底部 25%	内外面：ヘラ磨き
SK2	4	石製品 砥石	現存長　(6.5)　最大幅　(2.1)　最大厚　(1.1) 重量　21.1g					－		粘板岩
SK6	5	陶器 腰錆碗	(10.2)	(2.2)	－	BGM	灰白	A	口縁部破片	瀬戸美濃系　18C 後～ 19C 初 口縁外面～内面灰釉、胴部外面鉄釉
SK6	6	陶器 湯呑	(11.0)	(1.4)	－	BGM	灰白	A	口縁部破片	瀬戸美濃系　18C 末～ 19C 初 内外面灰釉
SK6	7	陶器 鉄絵皿	(11.4)	(1.9)	－	HM	灰白	A	口縁部破片	瀬戸美濃系　17C 後 見込みに鉄で蘭竹文　内外面長石釉
SK6	8	陶器 灯明皿(油皿)	－	(0.9)	(5.0)	HM	暗褐	A	底部 40%	瀬戸美濃系　18 ～ 19C 鉄釉の全面施釉ののち底部の釉を拭い取る
SK6	9	陶器 有耳壺	－	(1.5)	(13.8)	BGM	灰白	A	底部 15%	瀬戸美濃系　18C 体部外面鉄釉
SK6	10	磁器 染付碗	(10.4)	(1.5)	－	AB	灰白	A	口縁部破片	肥前系磁器　くらわんか碗　18C 代 外面に梅樹文
SK6	11	磁器 仏飯器	－	(3.2)	4.0	AB	灰白	A	脚部 80%	肥前系磁器　18C 末～ 19C 前 高台内無釉

第６号土坑（第 19・20 図５～ 11、第７表）

位置　Ａ－５グリッドに位置する。

規模　直径 2.9 m以上、確認面からの深さ 0.35 ～ 0.65 mである。

概要　遺構の北東部と南西部が調査区域外となるが、平面形状は円形を呈するものと思われる。断面は台形状で上部がオーバーハングしている。上・中層に浅間Ａテフラ・酸化鉄粒子を多量含み、各層に ø150 ～ 20 ㎜の小石を多量含む。遺構の南東部が深く、北西に向かって浅くなる。

遺物　本遺構からは陶磁器が出土しており、溝跡や他の土坑よりも出土量が多かった。５～９は瀬戸美濃系陶器で、５は 18 世紀後半～ 19 世紀初頭の腰錆碗である。体部外面には３条の沈線が巡り、口縁部外面から内面にかけて灰釉、体部外面には鉄釉が施される。６は 18 世紀末～ 19 世紀初頭の丸碗形の湯呑の口縁部である。内外面に灰釉が施される。７は 17 世紀後半の鉄絵皿で、内面に蘭竹文が鉄で描

かれる。8は18～19世紀の灯明皿（油皿）で鉄釉を全面施釉ののち底部周辺の釉を拭い取っている。9は18世紀代の有耳壺の底部で、内面及び外面底部周辺を除き鉄釉が施される。10・11は肥前系磁器である。10は18世紀代のくらわんか碗で、外面に梅樹文が染付される。11は18世紀末～19世紀前半の仏飯器の脚部である。

重複　南東部で第５号土坑と重複し、本遺構が古い。

時期　覆土に浅間Ａテフラを含み、また、出土遺物から本遺構が機能していたのは19世紀前半と考えられる。

第７号土坑（第19図）

位置　Ａ－６グリッドに位置する。

規模　長軸1.03ｍ以上、短軸0.3～0.72ｍ、遺構確認面からの深さ0.14～0.22ｍである。主軸方位はＮ－４°－Ｅである。

概要　調査当初は平面形状が楕円形の土坑と、溝状遺構が重複しているものと考えたが、土層断面を観察すると重複が見られず、同じ遺構と判断した。覆土上層は砂粒を含み、下層には浅間Ａテフラを主体とする平凸レンズ状の堆積層が見られた。また、最下層の第４層上面に薄い灰色粘土層が検出されており、水が滞留していたことが確認された。以上のことから、本遺構は南側の調査区域外から排出された水を、地下に浸透させる施設と考えられる。

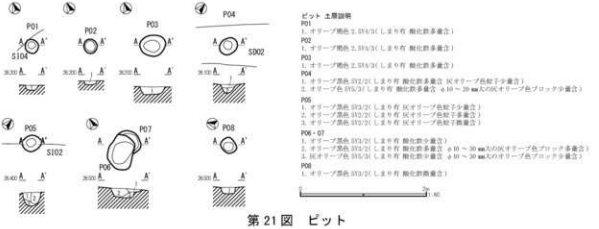
遺物　遺物は出土しなかった。

重複　単独の遺構である。

時期　覆土に浅間Ａテフラを含むことから、18世紀末以降である。

４　ピット（第21図、第８表）

ピットは総数８基が確認されたが、全て時期不明なもので計測値等は一覧表にまとめて掲載した。遺物は、Ｐ６から加工痕のない緑泥片岩が出土している。



第21図　ピット

第８表　ピット計測表

No	位置	平面形状	長軸×短軸×深さ（m）	出土遺物	重複関係（旧→新）	備考
1	G－３	円形	0.24 × 0.21 × 0.07		ＳＤ４→Ｐ１	
2	Ｈ－３	円形	0.24 × 0.21 × 0.06			
3	Ｈ－４	楕円形	0.4 × 0.35 × 0.1			
4	Ｇ－５	楕円形	0.3 × 0.25 × 0.14		ＳＤ２→Ｐ４	
5	Ｅ－３	楕円形	0.3 × 0.25 × 0.21		ＳＩ２→Ｐ５	
6	Ｂ－５	不整楕円形	0.53 × 0.35 × 0.15	凝灰片岩	Ｐ６→Ｐ７	
7	Ｂ－５	楕円形	(0.41) × (0.23) × 0.05		Ｐ６→Ｐ７	
8	Ｂ－５・６	楕円形	0.26 × 0.21 × 0.1			

5　遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物、及び遺構外出土遺物を掲載する。土師器・陶磁器・瓦質土器が出土している。

遺物（第 22 図、第８表）　１・２は土師器で、１は肩部に三条の沈線が施される五頭期の壺である。２は壺の底部で底部外面は上げ底になっている。３は 19 世紀の瀬戸美濃系陶器の徳利底部で、備前写しのいわゆるべこかん徳利である。体部外面に鉄釉が施されている。４～６は肥前系磁器染付碗で、４・５は 18 世紀代のくらわんか碗である。４は外面に梅樹文が描かれ、見込みは蛇の目釉剥ぎされる。５は外面に雪輪梅樹文が描かれている。４・５共に底部付近の器肉が厚い。６は 18 世紀末～ 19 世紀初頭の筒形碗である。外面に菊花文・格子目文が描かれ、口縁部内面には二重圏線が描かれている。７は昭和戦後の瀬戸美濃系磁器染付の広東形碗である。外面にコバルトによる圏線が描かれ、貼り付けの高台が「ハ」の字状に開く。８は近代の瓦質土器の煉炭おこしで煙突部を欠く。

第 22 図　遺構外出土遺物

第９表　遺構外出土遺物観察表

調査区	No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
H-3グリッド	1	土師器 壺	－	－	－	BDIKN	にぶい褐	B	肩部破片	外面：やや太いヘラ描平行沈線、しの無節縄文 内面：横ヘラナデ　五頭期
B 区北	2	土師器 壺	－	(1.2)	3.6	ABDKN	橙	B	底部 90%	外面：ヘラ磨き 上げ底
B 区西	3	陶器 徳利	－	(2.4)	(6.8)	GM	外面：にぶい赤褐 内面：灰白	A	底部 20%	瀬戸美濃系 べこかん徳利 19C 外面：鉄釉を施した後、底部の釉を拭い取る 内面：無釉 ロクロ痕顕著
B 区西	4	磁器 染付碗	－	(3.8)	(4.0)	B	灰白	A	体部～高台 30%	肥前系磁器 くらわんか碗 18C 代 外面に梅樹文 見込み：蛇の目釉剥ぎ 重ね焼き痕有
B 区西	5	磁器 染付碗	(9.2)	4.8	(3.5)	B	灰白	A	30%	肥前系磁器 くらわんか碗 18C 代 外面：雪輪梅樹文
B 区西	6	磁器 染付碗	(6.8)	(2.3)	－	B	灰白	A	口縁部破片	肥前系磁器 筒形碗 19C 末～ 19C 初 外面：格子目文・菊花文 内面：口縁上方二重圏線
B 区西	7	磁器 染付碗	－	(3.1)	(4.4)		白	A	体部～高台 30%	瀬戸美濃系磁器 広東形碗 昭和戦後 外面：コバルトによる染付 体部と高台貼付け
B 区西	8	瓦質土器 煉炭おこし	(11.4)	(4.3)	(11.5)	AHI	外面：褐灰 内面：にぶい橙	B	10%	近代　大沼俵？「ひょっとこ」とも呼ばれる 内面：ロクロ痕顕著

V　調査のまとめ

今回の調査で確認された遺構は、竪穴建物跡４棟、溝跡２条、土坑７基、ピット８基である。竪穴建物跡は、４棟とも古墳時代中期の和泉期に属するものであった。溝跡は２条とも竪穴建物跡と重複していたが、建物跡より新しいもので 18 世紀末以前のものと、それ以降のものがある。土坑は 18 世紀末以降で 19 世紀後半に属するものもあった。このことから、本調査区では古墳時代中期と江戸時代後期から明治時代にかけての２時期があることが確認された。

なお、本調査区からの最も古い遺物には、表採された古墳時代前期の五領期の土師器がある。本遺跡の北側に隣接する出口上遺跡や肥塚中島遺跡・出口下遺跡の調査では、いずれも古墳時代後期からの遺構・遺物が確認されているが、前期の土器は出土していない。このことから、本遺跡には古墳時代前期の集落跡の存在が想定される。

今回の調査で特筆されるものに、第４号竪穴建物跡で確認された敷石と、その周辺出土の遺物がある。敷石は拳大から親指大、小指大のもので竪穴建物跡の南西部の床面上に敷かれていた。そして、敷石には石の空白部分が２箇所あり、さらに円形の空白部付近からは完形の土師器高坏が立位の状態で、また、完形の坏が正位で出土しており、空白部の周辺からは８個体の高坏が出土している。臼玉などの石製模造品などは確認されていないが、遺物の大半が敷石の範囲内に集中しており、その出土状況から竪穴建物内において何らかの祭祀が執り行われていたものと考えられる。

市内の古墳時代前期及び後期の集落跡の確認例は増加しているが、中期の集落跡は確認例が少ない。今後は資料の増加を待って、集落の変遷をたどることが課題である。

さて、今回の調査区では中世の遺構・遺物は確認されなかったが、遺跡名は肥塚館跡である。そこで、肥塚氏及び肥塚館について述べてみたい。

正平７年（1352）、美作左衛門大夫（本郷）家泰が、勲功により元は牧七郎兵衛のものであった大里郡桃塚郷を、室町幕府将軍足利尊氏から与えられている。江戸後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』（以下、『風土記稿』）では、この桃塚を枇塚（ひづか）に充てている。さらに、枇塚は肥塚の当て字で、肥塚は古くは「ひづか」とも呼んでいたとしている。また、応永３年（1396）に当地方で大般若波羅密多経の書き写しが行われたが、そのおり、村岡（熊谷市村岡）の如意輪寺担当分の巻を、肥塚の宝珠寺（所在地不明）で書写している。一方、上野国新田荘にあった世良田山長楽寺（群馬県太田市）の住持、賢甫義哲が著わした『長楽寺永禄日記』の永禄８年（1565）の項には、北条氏邦が忍城を攻める際、同年９月 15 日に三相（御正＝熊谷市御正新田付近）の陣を払いコエ塚（肥塚）に着陣し、同月 20 日には越塚（肥塚）の陣を払い、奈良（同市奈良）に陣を進めたと記されている。

肥塚氏は肥塚郷を本貫地とし、その館跡は成就院周辺といわれている。肥塚氏系図（第 23 図）によれば、熊谷氏の祖である直季が熊谷に住し、弟の直長が肥塚に住んで肥塚を称し、その祖となったとされている。承久３年（1221）、朝廷と鎌倉幕府との間に勃発した承久の乱では、肥塚太郎が熊谷平内左衛門（直国）らとともに幕府軍に加わり、近江国勢多橋（滋賀県大津市）の戦いで討死している。

肥塚地内観音堂の北側には２基の板石塔婆が建立されており、康元２年（1257）銘のものが肥塚太郎九郎光長の碑とされ、阿弥陀種子（キリーク）が刻まれ、その下に無量寿経の偈文と「道義禅門」の名

が記されている。もう１基は応安８年（1375）銘で肥塚八郎盛直の碑とされ、地蔵種子（カ）が刻まれ、その下の左右に光明真言と「道幾禅門」の名が記されている。

肥塚氏系図

第 23 図　肥塚氏系図（『熊谷市史』前編より）

また、延宝６年（1678）、妙心寺派の禅僧である卍元師蛮が著わした『延宝伝灯録』によれば、応安２年（1369）、肥塚道耳が大拙祖能和尚を開山とし、武蔵の勧喜寺（所在地不明）を開基したと記されている。肥塚氏はこの頃まで肥塚を領有していたようであるが、この後、西国の石見国（島根県）や但馬国（兵庫県北部）、播磨国（同県南西部）などに移ったとされる。時代は下って戦国時代末期の天正10年（1582）、忍城主成田氏が編成した「成田氏分限簿」には、永二十貫文「肥塚因幡」、永十三貫文「聲塚喜右衛門」と肥塚を名乗る家臣２名の禄高が記されており、両者は共に肥塚氏の末裔と考えられる。ちなみに、永は田畑からの収穫を永楽銭で見積もった「永高」のことである。

第 24 図　肥塚村字本村地内の地名（『肥塚の今昔』より作成）

続いて肥塚の地名に関しては、『風土記稿』の肥塚村の小名に「新里新田」「堀ノ内」「圓光塚」「下田」が記されている。このうち、館跡に関係する地名は堀ノ内であるが、現在の肥塚の小字に堀ノ内は見当たらない。しかし、地内の伊奈利神社が所収されている『埼玉の神社　大里　北葛飾　比企』には、この神社の氏子区域は肥塚全域で、中廓・前廓・円光・東廓・東原・八反田Ⅰ・八反田Ⅱ・北廓・篠竹・堀の内・新田西浦・南・鼠塚・新里・塚原の 15 の村組に分かれると記されている。この中の「中廓」「前廓」「東廓」「北廓」「篠竹（ハシノダテヵ）」「堀の内」の各地名は館に関するものと思われる。

昭和45年に高木幹雄氏が著わした『肥塚の今昔』によると、中廓と東廓は記されていないが、前廓・北クルワ（北廓）・堀内（堀の内）・シノ竹（篠竹）が記されており（第24図）、これらの地名は全て字本村（ほんそん）内に位置する。前廓は伊奈利神社周辺で、南北は同神社から北方へ約120 m、東西は県道熊谷・館林線から西へ約30 mの縦長の長方形を呈している。北クルワとシノ竹は前廓の北側に接し、南北は約50 m、東西は県道熊谷・館林線から西の県道太田・熊谷線までの間約140 mで、横長の長方形を呈している。この長方形の東側を北クルワとし、西半分をシノ竹としている。また、堀内は肥塚公民館の北西約30 mの一帯で、北クルワとシノ竹に接する部分を示している。なお、今回の調査地の近隣の方の話によると、字本村の東に接する字辛（かのと）付近を東廓と呼ぶという。

以上のことから類推すると、所在が不明の中廓は成就院周辺が相当するものと思われる。『風土記稿』によると成就院は、肥塚山阿弥陀寺と号す真義真言宗の寺で、江戸愛宕真福寺（東京都港区）の末、古くは鎌倉胡桃谷大楽寺（神奈川県鎌倉市＝廃寺）の末とされる。開山は欽照和尚で、欽照は永正元年（1504）に没すると記されている。また、寺の縁起では、当寺は古くは地内観音堂の西側に所在していたが、嘉永7年（1850）の火災により本堂などを悉く消失。そのため、明治15年（1882）、忍東照宮（行田市）の拝殿を買い受け、成就院の門徒であった、若宮山観音院真蔵寺跡である現在地に移築したという。

一方、館の遺構は明治期迅速図（第25図）を見ても判然としないため、先ずは近隣遺跡の遺物や遺構を見ていきたい。幸い、本遺跡の北側でその範囲が一部重複する出口上遺跡や、さらに北側の肥塚中島遺跡、北東で範囲が一部重複する出口下遺跡からは、中世の遺構・遺物が確認されているため、ここでは、この3遺跡（第3図）の遺構と遺物を概観する。

第25図　明治期迅速図の肥塚村字本村周辺

第26図　迅速図の道の復元

出口上遺跡は平成９・10年に調査が実施され、溝跡や土坑・土壙墓・火葬跡・井戸跡・石組遺構が確認されている。溝跡からは瓦質片口鉢・古瀬戸後Ⅲ期（以下、古後Ⅲ期＝1420～40年代）の卸目付大皿、土坑からは15世紀後半から16世紀初頭の古河公方系かわらけ・瓦質片口鉢・12世紀中頃から13世紀代の龍泉窯系青磁碗Ⅰ４類・青白磁の合子の蓋、石組遺構からは12世紀代の渥美甕、井戸跡からは瓦質片口鉢や古後Ⅲ期の平碗が出土している。また、グリッド出土遺物には、古瀬戸後期の柄付片口の把手・古河公方系かわらけ・瓦質片口鉢などがある。

平成７年に調査が実施された肥塚中島遺跡の調査でも、溝跡や土坑・土壙墓・火葬跡・井戸跡が確認されている。溝跡からは古後Ⅲ期の縁釉小皿、15世紀代の高台に抉り込みが入る中国産白磁皿・15世紀中頃から後半の土鍋・古河公方系のかわらけ、常滑６a型式（1250～75年代）の片口鉢Ⅰ類、土坑からは瓦質片口鉢・13世紀代の龍泉窯系青磁蓮弁文碗Ⅰ５類や同折縁皿・古後Ⅲ期の折縁深皿・瓦質片口鉢が出土している。また、グリッド出土遺物には、12世紀中頃から13世紀代の龍泉窯系青磁碗Ⅰ４類、13世紀中頃から14世紀前半の白磁口禿皿Ⅸ類などがある。

平成８～10・12年に亘って調査が実施された出口下遺跡では、溝跡や土坑・火葬跡・集石・井戸跡が確認されている。溝跡からは瓦質片口鉢、土坑からは16世紀末から17世紀初頭の肥前系陶器絵唐津の大皿、集石からは瓦質甕や15世紀中頃の土鍋・土釜、井戸跡からは19世紀前半の瀬戸美濃系片口や堺・明石系擂鉢、肥前系磁器染付皿が出土している。また、グリッド出土遺物には小型かわらけがある。

このように見てくると陶磁器は、伝世することが多い中国産の青磁・白磁・青白磁を除くと15世紀代の遺物が中心で、それらに加えて、15世紀後半から16世紀初頭の古河公方系かわらけが数多く出土していることがわかる。そして、16世紀以降の瀬戸美濃系の大窯製品が全く出土せず、また、16世紀前半には出現するとされる、ほうろくも確認されていない。これらのことから考えると、この地には15世紀から16世紀初頭にかけて、古河公方の傘下となった武蔵武士や一揆の館、あるいは、その集落などが墓域を伴って存在していたと推定される。

なお、１点ではあるが出口下遺跡の土坑から、肥前系陶器絵唐津の大皿が出土していることから、本遺跡を含む４遺跡周辺には、戦国時代末期から近世初頭の遺構が存在する可能性もある。

前述のとおり、肥塚氏は14世紀半中頃まで当地を本貫とし、その後、西国に移ったとされている。そのため、これらの遺構・遺物は肥塚氏が西国に移った後、同氏とは関わりのない某氏が入植し、当地に蟠踞したその痕跡と考えられる。しかし、戦国時代末期の「成田氏分限簿」には２名の肥塚氏が家臣として記されており、この事実から忍領国内には肥塚氏が依然として住していたことがわかる。こうしたことから類推すると、14世紀半中頃に肥塚氏全てが西国に移ったわけではなく、その分派が当地に残り、14世紀半中頃から16世紀末まで、代々脈々と受け継がれたとも考えられる。

以上、肥塚氏及び肥塚館について述べたが、本館跡の発掘調査は今回が初めてであり、調査成果からはその実態は不明であると言わざるを得ない。今後は調査件数の増加により新たな事実が判明し、出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚中島遺跡との関連性も含め、肥塚館が詳らかになっていくことを望むものである。

なお、末筆ではありますが、今回の調査で大変お世話になりました肥塚の方々や、調査の際、休憩所などを提供していただいた、江森和夫氏にあらためて、感謝の意を表します。

主要引用・参考文献

愛知県史編さん委員会　2103『愛知県史』別編　窯業３　中世・近世　常滑系

愛知県瀬戸市　1998『瀬戸市史』陶磁史編　六

赤熊浩一　1989『金井遺跡Ｂ区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 146 集

赤熊浩一・瀧瀬芳之　2006『下田町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 319 集

安芸毬子・大成可乃・大貫浩子・坂野貞子・成瀬晃司・堀内秀樹　1999「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2　別冊

秋本太郎　2005「上野と周辺地域との関係―在地土器の分布論から探る―」第１回内陸遺跡研究会シンポジウム資料集『海なき国々のモノとヒトの動き―16～17 世紀における内陸部の流通―』内陸遺跡研究会

2008「戦国期北関東のかわらけ―戦国大名支配との関係―」『戦国大名北条氏』中世東国の世界３

磯崎　一・中山浩彦　2006『下田町遺跡Ⅳ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 320 集

岩槻市教育委員会　2005『岩槻城と城下町』いわつき郷土文庫　第三集

江戸遺跡研究会　2001『図説　江戸考古学研究辞典』

大成可乃　2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7

大里村史　1990『大里村史』（通史編）

大橋康二　1984「肥前陶磁の変遷と出土遺物」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

小野正敏　2000「遠江の出土陶磁器組成の特徴」『横地城跡　総合調査報告書　資料編』菊川町教育委員会

熊谷市　1963『熊谷市史』前編

2013『熊谷市史』資料編２　古代・中世　本編

2015『熊谷市史』資料編１　考古

2018『熊谷市史』通史編上巻　原始・古代・中世

熊谷市立図書館　1993『熊谷の地名と旧跡』

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10 周年記念

2001『国内出土の肥前陶磁』東日本の流通をさぐる

黒田基樹 編　2012『武蔵成田氏』論集戦国大名と国衆７　岩田書院

江南町　1995『江南町史』資料編１　考古

埼玉県神社庁神社調査団編　1992『埼玉の神社　大里 北葛飾 比企』埼玉県神社庁

坂詰秀一 他　1997『落川・一の宮遺跡調査略報』5　落川・一の宮遺跡（日野３・２・７号線）調査会

寺社下　博　1982『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』昭和 56 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

高木幹雄　1970『肥塚の今昔』肥塚公民館・肥塚寿会

立石盛詞 他　1982『後張遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 15 集

1983『後張遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 26 集

田中　信　1996「川越市内出土の中世土師器について―特に河越館跡および周辺出土を中心に―」『川越市埋蔵文化財調査報告書（ＸＩ）』川越市教育委員会

2005「山内上杉氏の土器（かわらけ）とは」『戦国の城』高志書院

中野晴久　2013　『中世常滑窯の研究』 博士（文学）論文　愛知学院大学大学院
藤澤良祐　1987　「本業焼の研究（1）」『研究紀要』Ⅵ　瀬戸市歴史民俗資料館
1987　「本業焼の研究（2）」『研究紀要』Ⅶ　瀬戸市歴史民俗資料館
1987　「本業焼の研究（3）」『研究紀要』Ⅷ　瀬戸市歴史民俗資料館
2008　『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
松田　哲　2001　『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群 14・15・16 号墳』 平成 12 年度熊谷市教育委員会埋蔵文化財調査報告書
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No2　貿易陶磁研究会
横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

肥塚古墳群Ⅱ・肥塚館跡

写 真 図 版

A 区全景（東から）

A 区全景（西から）

B 区全景（北から）

B 区全景（南から）

第 1 号竪穴建物跡（南西から）

第 1 号竪穴建物跡遺物出土状況

第 2 号竪穴建物跡（北東から）

第 2 号竪穴建物跡遺物出土状況（1）

図版 2

第２号竪穴建物跡遺物出土状況(2)

第２号竪穴建物跡遺物出土状況(3)

第３号竪穴建物跡(北東から)

第３号竪穴建物跡遺物出土状況(北東から)

第３号竪穴建物跡遺物出土状況（1）

第３号竪穴建物跡遺物出土状況（2）

第３号竪穴建物跡遺物出土状況（3）

第３号竪穴建物跡遺物出土状況（4）

第３号竪穴建物跡カマド（北東から）

第３号竪穴建物跡カマド遺物出土状況

第３号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況（東から）

第４号竪穴建物跡（北東から）

第４号竪穴建物跡敷石検出状況（上が南）

図版 4

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (1)

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (2)

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (3)

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (4)

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (5)

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (6)

第 4 号竪穴建物跡遺物出土状況 (7)

第 4 号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況（南から）

第４号竪穴建物跡貯蔵穴遺物出土状況

第１号溝跡(B区 西から)

第２号溝跡完掘(北東から)

第１号土坑(西から)

第２号土坑(北から)

第３・４号土坑(北から)

第５・６号土坑（西から）

第７号土坑(西から)

図版 6

第１号竪穴建物跡 第６図１

第２号竪穴建物跡 第８図１

第２号竪穴建物跡 第８図２

第２号竪穴建物跡 第８図３

第２号竪穴建物跡 第８図４

第２号竪穴建物跡 第８図５

第２号竪穴建物跡 第８図６

第２号建物跡 第８図７

第２号竪穴建物跡 第８図８

第３号竪穴建物跡 第 11 図１

第３号竪穴建物跡 第 11 図２

第３号竪穴建物跡 第 11 図３

第３号竪穴建物跡 第 11 図４

第３号竪穴建物跡 第 11 図５

第３号竪穴建物跡 第 11 図６

第３号竪穴建物跡 第 11 図７

第３号竪穴建物跡 第 11 図８

第３号竪穴建物跡 第 11 図９

第３号竪穴建物跡 第 11 図 10

第３号竪穴建物跡 第 11 図 11

第３号竪穴建物跡 第 11 図 13・16

第３号竪穴建物跡 第 11 図 12・14・15

図版 8

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 17

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 19

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 20

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 18

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 21

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 24

第 3 号竪穴建物跡 第 11 図 25

第 3 号竪穴建物跡 第 12 図 29

第 3 号竪穴建物跡 第 12 図 30・31

第４号竪穴建物跡 第 15 図１

第４号竪穴建物跡 第 15 図２

第４号竪穴建物跡 第 15 図３

第４号竪穴建物跡 第 15 図４

第４号竪穴建物跡 第 15 図５

第４号竪穴建物跡 第 15 図６

第４号竪穴建物跡 第 15 図８

第４号竪穴建物跡 第 15 図９

第４号竪穴建物跡 第 15 図７

第４号竪穴建物跡 第 15 図 10

第４号竪穴建物跡 第 15 図 11

第４号竪穴建物跡 第 15 図 12

第４号竪穴建物跡 第 15 図 13

第４号竪穴建物跡 第 15 図 14・15

第４号竪穴建物跡 第 15 図 16 ～ 18

図版 10

第４号竪穴建物跡 第 15 図 19

第４号竪穴建物跡 第 15 図 20

第４号竪穴建物跡 第 15 図 21

第４号竪穴建物跡 第 15 図 22

第４号竪穴建物跡 第 16 図 24・25

第１号溝跡 第 20 図２

第２・６号土坑 第 20 図４～11

遺構外出土遺物 第 22 図１

遺構外出土遺物 第 22 図３～８

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こいづかこふんぐん　に・こいづかやかたあと
書　　名	肥塚古墳群Ⅱ・肥塚館跡
副 書 名	―
巻　　次	―
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３６集
編 著 者 名	島村　範久　　腰塚　博隆
編 集 機 関	熊谷市教育委員会
所　在　地	〒360-0107 埼玉県熊谷市千代３２９番地 熊谷市江南文化財センター TEL048-536-5062
発行年月日	西暦 2020（令和２）年３月 27 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (° ′ ″)	東経 (° ′ ″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こいづかこふんぐん 肥塚古墳群	くまがやしこいづかいっちょうめ 熊谷市肥塚一丁目 380-1、380-2、 381-1 の一部、 381-3	11202	059-012	36° 09′ 36″	139° 23′ 25″	20181015 ～ 20181220	370 ㎡	記録保存 調査
こいづかやかたあと 肥塚館跡			059-069					

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
肥塚古墳群・ 肥塚館跡	集落跡	古墳時代 近世・近代	竪穴建物跡４棟 溝跡２条 土坑７基	土師器・石製品・ 陶器・磁器	古墳時代中期の竪穴建物跡から、祭祀跡と考えられる石敷の遺構を検出した。

要約

肥塚古墳群・肥塚館跡は、新期荒川扇状地の妻沼低地内に点在する、自然堤防上に立地している。

肥塚古墳群では、これまでに１６基の古墳が確認されており、いずれも、６世紀から８世紀初頭にかけてのものであるが、今回の調査では古墳は確認されていない。

しかし、調査では市内でも調査例の少ない時期である、古墳時代中期の竪穴建物跡が４棟確認された。そのうちの１棟からは、玉砂利の敷石を伴う祭祀跡と思われる遺構が検出された。ここからは数多くの高坏・坏がまとまって出土しており、これは他に類例を見ないものである。

当遺跡周辺の調査では、古墳時代後期の竪穴建物跡が確認されていることから、これに繋がる集落跡と考えられる。

また、調査区は肥塚館跡の範囲にもなっているが、今回の調査では、中世の遺構は確認されず、江戸時代後期から近代にかけての遺構・遺物が検出されている。

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第３６集

肥塚古墳群Ⅱ・肥塚館跡

令和２年３月２７日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／株式会社ピーアイピー